境界としての〈猫〉
―ポストヒューマンの時代に「猫と生きる」とはいかなることか

遠　藤　　薫

1．はじめに

情報技術の進展にともない，AIやロボットなど新たな「他者」との関係に注目が高まりつつある．一方，これと呼応するように，従来自然の一部とも見なされてきた「動物」にも，改めて自律的な「他者」性が発見され，われわれの世界観を根底から揺るがしつつある．本稿は，このような時代背景と問題意識から，とくに「猫」の境界性に着目しつつ，ポストヒューマンの時代の社会学を構想するものである．

筆者は，上記問題意識にもとづいてすでに多年にわたり〈猫〉研究を続けてきた．その全体構想は，図1に示すとおりである．本稿では，とくに「犬」との比較において，現代における社会的構築物としての〈猫〉について検討することとする．

2．猫ブームとは何か―猫と犬

最近は，空前の猫ブームである．誰も彼もがネコを見ると思わず頬が緩む．ネコグッズ，ネコの写真集に，ネコ本．ネコ関連の展覧会も全国で目白押しである．なぜいま，ヒトはそんなにネコに夢中なのだろう？

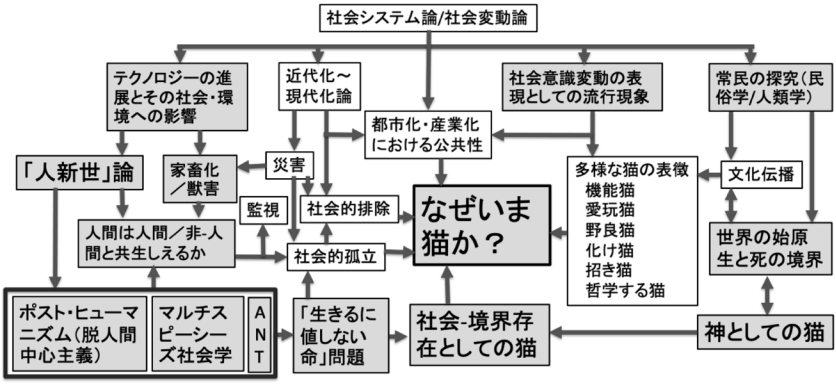


図１　〈猫〉を問うことによって何が明らかになるか

2.1　犬から猫へ

かつて，ペットといえばイヌだった．図２に示す『フランダースの犬』のパトラッシュといい，『南極物語』のタロ・ジロといい，忠犬ハチ公といい，強く，たくましく，どこまでも献身的なイヌたちこそが，人間の相棒としてふさわしいというイメージが一般的だった．ネコ好きが少なかったわけではないけれど，ネコを飼うのはたとえ野良猫や捨て猫を拾ってきたのであろうと，

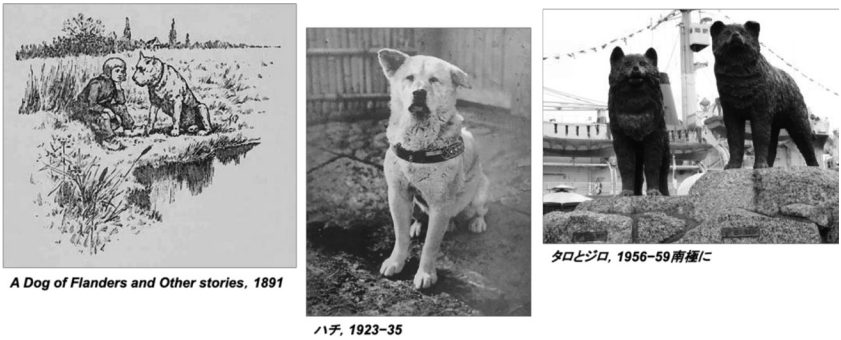


図２　「人間の忠実な僕」としての〈犬〉たち（左：『フランダースの犬』挿絵（1891, https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Nello_%26_Patrasche.JPG），中央：生前の忠犬ハチ公（https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Faithful_Dog_Hachiko_Photo.png），右：タロとジロの像（https://commons.wikimedia.org/wiki/File:The_Statues_of_Taro_%26_Jiro_in_Garden_Pier,_Minato-machi_Minato_Ward_Nagoya_2009.jpg））

ちょっと趣味的な感じがした．犬は「番犬」などの役割をしっかり認識しているようだったが，猫は「鼠を捕る」といわれてはいても気まぐれで成果はそれほど期待できなかった．

しかし，2000年代を過ぎる頃から猫へのメディア的注目が高まりを見せている．一般社団法人ペットフード協会の調査によれば，2013年以降猫の飼育数が犬のそれを超え，差は拡大傾向にあるという（図３）．その理由として，近年における生活環境の変化と，猫・犬の生物学的特性との関係もあるだろうが，それ以上に，〈猫〉の社会的イメージが，現代に適合的に構成可能であることが指摘できるのではないか．

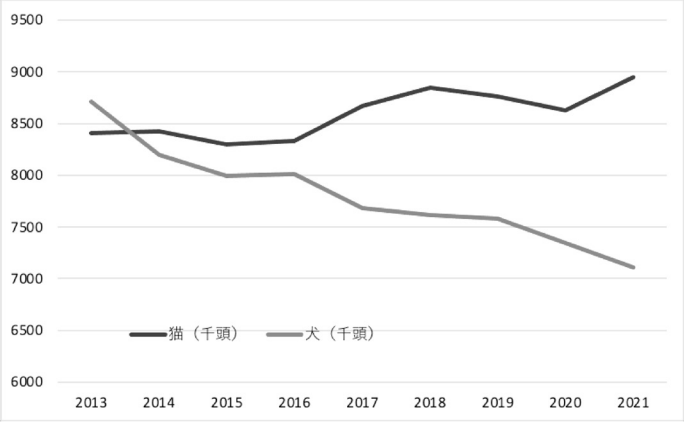


図３　猫の飼育数（推計）の推移（データ:（一社）ペットフード協会「令和３年全国犬猫飼育実態調査」，グラフ作成：遠藤）

自宅で飼うだけでなく，猫カフェ[1]で猫と戯れる楽しみ方もある．また，地域猫[2]との共生の試みや，「猫島」など猫による観光地化の例も多い（図４）．

1）『日経トレンデイネット2008年５月２日』（http://trendy.nikkeibp.co.jp/article/column/20080422/1009762/）によれば，「猫カフェの始まりは1998年台湾にオープンした「猫花園」．猫と同じ空間でお茶を飲めるというスタイルが台湾国内で話題になり，このお店には日本からの観光客も訪れるようになった．日本ではまず大阪に2004年「猫の時間」が開店，2005年には町田の「ねこのみせ」が関東の第一号としてオープンした」．

2）環境庁「住宅密集地における犬猫の適正飼養ガイドライン」（平成22年２月）によれば，「地域の理解と協力を得て，地域住民の認知と合意が得られている，特定の飼い主のいない猫．その

図４　猫カフェ（左），地域猫に不妊手術を施す「さくらねこTNR」運動ホームページ[3]（中央），「猫島」として知られる田代島の猫神社と野猫（遠藤撮影）（右）

2.2　猫ブームの社会的背景

では，この頃社会で何が起きただろう．大きな変化といえば，少子高齢化と人口縮小社会への転換である．15 ～ 64歳人口（生産年齢人口）は1995年をピークに減少を始め，2020年時点で13.9％も減少した．総人口も2008年をピークとして下り坂に入った（図５）．一方，ひとり暮らしが増加し，単身世帯が全体の38％を占める「単身社会」が到来している．

こうなると，猟犬や番犬の勇猛さと飼い主への忠誠を誇る大型犬は，暮らしの風景にちょっとそぐわなくなってしまう．毎日散歩に連れて行かなくてはならないのも結構負担だ．だったら，小さい身体で，飼い主のことには頓着せず，勝手気ままに人生を楽しんでいるように見えるネコの方が，生活のコンパニオンとして愛おしい．だから最近は，イヌでも体重10kg以下のかわいい小型犬が人気のようである．ペットフード協会の調査[4]によれば，ここ数

地域にあった方法で，飼育管理者を明確にし，飼育する対象の猫を把握するとともに，フードやふん尿の管理，不妊去勢手術の徹底，周辺美化など地域のルールに基づいて適切に飼育管理し，これ以上数を増やさず，一代限りの生を全うさせる猫を指す．

3）https://www.doubutukikin.or.jp/activity/campaign/story/

4）「令和３年　全国犬猫飼育実態調査」（https://petfood.or.jp/data/chart2021/index.html）

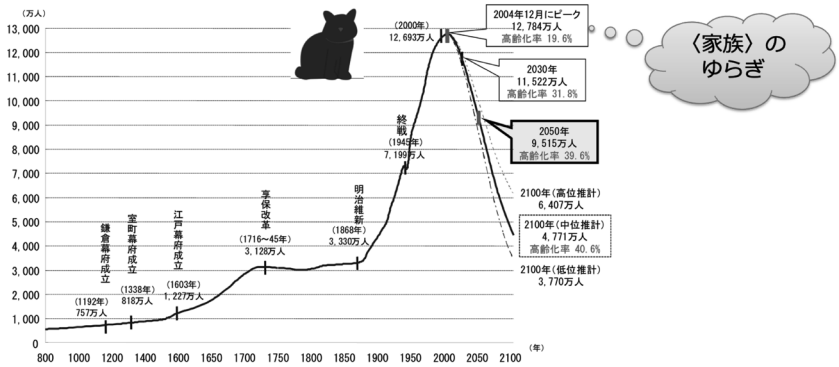


図５　我が国における総人口の長期的推移（出典：「国土の長期展望」中間とりまとめ 概要（平成23年2月21日国土審議会政策部会長期展望委員会））

年，飼育されている犬種の中で圧倒的に多数を占めているのは，トイ・プードル，柴犬，チワワ，ミニチュア・ダックスフンドの「カワイイ」系４犬種である（図６）．先に挙げたフランダースの犬がシェパード系の大型犬（異説あり），タロ・ジロが樺太犬，ハチ公が秋田犬といった使役用の大型犬であるのとは大きく違う．イヌのネコ化といえようか．だがやはり，イヌはネコとは違う．

図６　人気の4犬種（左から，トイ・プードル[5]，柴犬[6]，チワワ[7]，ミニチュア・ダックスフンド[8]）

であれば，小さい身体で，飼い主のことには頓着せず，勝手気ままに人生を楽しんでいるように見えるネコの方が，生活のコンパニオンとしてふさわしいと考える人がいても不思議はない．ちなみに，犬は長い家畜化の過程で，

5）Public Domain　https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Koenigspudel_auf_dem_Boot.jpg
6）CC. By 3.0　https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Fm_shiba_inu_puppy.jpg
7）CC. By 4.0　https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Agradable_sol_dilan.jpg
8）CC. By 3.0　https://commons.wikimedia.org/wiki/File:MiniDachshund1_wb.jpg

交配により，「純血種」という概念が構成され，「血統」が重視されている．これに対して，ねこはほぼすべてのねこが一つの種から生まれてきた「雑種」であり，ほとんどの飼い猫は「雑種」である．猫についても，「猫種」が重視されるようになったのは，近年のことである．

また，一般社団法人ペットフード協会の調査で興味深いのは，「生活に喜びを与えてくれる存在」の１位が，犬飼育者では「家族」であるのに対して，猫飼育者では「ペット」．これはすなわち，犬飼育者にとっては「家族あってこそのイヌ」であり，猫飼育者にとっては「まずネコありき」という感覚なのだろうか．まさに「独身者が猫を飼い始めたら結婚願望が冷めた証」という俗説が実態と一致しているのかもしれない．

2.3　猫好きと犬好き――意識調査の結果より

イギリスの政治哲学者であるジョン・グレイは，「犬」と「猫」をそれぞれタイトルに付した書籍を刊行している．『わらの犬』と『猫に学ぶ』の二冊である．しかしこれらの副題がそれぞれ「地球に君臨する人間」「いかに良く生きるか」であることからも察せられるように，グレイの犬と猫に対する態度はかなり偏っている．すなわち，前者のタイトルにある「わらの犬」とは，老子『道徳経』の「天地不仁，以万物為芻狗」（天地自然は非常であって，あらゆるものをわらの犬のようにあつかう）」（Grey:v）からとっており，その「趣意は思想家の不用意な謬見を論破することである（viii）」と述べており，いいたいことは，人間の科学技術信仰が人間を破滅に導く可能性に関する警鐘である．この本に，生物種としての犬に関する記述は一切ない．これに対して，後者は，タイトル通り，猫の「生き方」がまさに老子の理想と一致しており，人間は生物種としての猫のあり方に学ぶべきであると主張している．

同様に，科学史家であるダナ・ハラウェイは，『伴侶種宣言』『犬と人が出会うとき』などを著しているが，それらではほぼ「犬」にしか言及していない（「猫のゆりかご」はでてくる）．

一般の動物愛好家においても，しばしば「猫派」「犬派」ということが言わ

境界としての〈猫〉―ポストヒューマンの時代に「猫と生きる」とはいかなることかれるが，それは何を意味するのか．筆者が2022年６月に行った調査（以下，2022年６月調査）[9] の結果から見てみよう．

図７は，動物に関する嗜好を尋ねた結果を，性別，年代別にクロス集計したものである．「嗜好」は,「猫だけが好き（猫派）」「犬だけが好き（犬派）」「犬も猫も好き（動物好き）」「犬も猫も好きではない（動物嫌い」に分類した．

これによれば，全体として犬派の方が猫派より多い．性別によって犬派猫派の割合に有意な差はない．「動物好き」は女性の方が多い．また年代別では，中年層（40 ～ 50代）で動物嫌いは最も少なくなる．若年層では「動物嫌い」が多い．「動物好き」の割合は，年代による有意な差はない．

また図８は，猫派・犬派の家族関係を尋ねた結果だが，配偶者がいない人の方が猫派が多い，子どもがいない人の方が猫派が多い，などの違いが観察された．

つまり，犬は人間に従属し，家族システムの構成要素であるが，猫はそうではないという（少なくとも）イメージが,現代の社会には埋め込まれているといえる．

実際，AI自動イメージ画像生成システム（Stable Difusion Demo）で,「Dog Human」と「Cat Human」というキーワードで画像を生成してみると，図９のよう前者では，人間が犬を愛おしみ，犬は人間に忠実に従うイメージが生成され，後者では，人間と猫が独立に存在するイメージが生成されることが

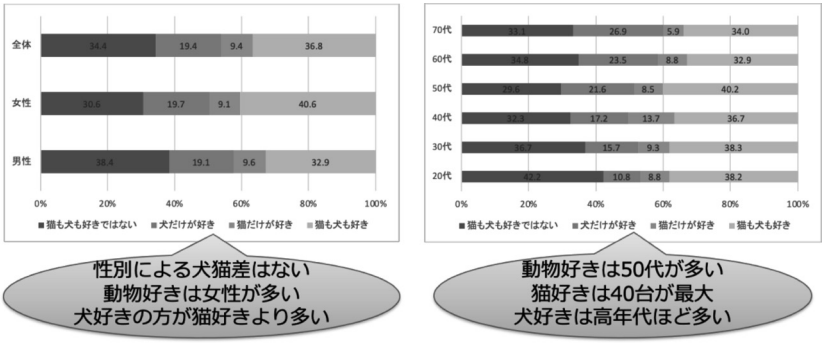


図７　犬好きvs.猫好き（データ出所：2022年６月調査）

9）2022年６月遠藤調査：実施主体；遠藤薫，調査方法;インターネットモニター調査，実施時期；2022年６月，サンプル抽出；都道府県別，性別，年代別割当て，サンプル数：2103

多い．現代のAIの深層学習では，人間社会に潜む無意識のバイアスが抽出されることが多い．その点から考えれば，AI画像生成結果は，上記の埋め込みを裏付けているといえる．

動物行動学からの知見も含めて，犬と猫の比較を表１に示す．

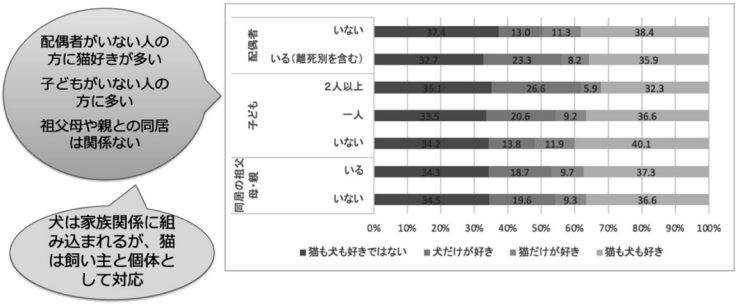


図８　犬好きvs.猫好き：家族との関係（2022年６月遠藤調査結果より）

図９　AI自動イメージ画像生成システム（Stable Difusion Demo）により作成した画像（左：Dog Humanで生成，右：Cat Humanで生成）

表１　犬と猫の比較

	イヌ	ネコ
家畜化	１万年前頃、採集狩猟民	9500年前頃，農耕民
	人間をボスと認め、自己家畜化	人間
飼い主に対する態度	従順、忠誠	勝手、気まま
ケア	毎日の散歩、大型犬が多い	とくにない
血統	多種多様、重視	ほぼ雑種（祖先はほぼ一種）
	（近年は小型犬需要が高まる）	（近年は血統需要が高まる）
飼い主の最高の癒やし（ペットフード協会）	１位は家族	１位はペット
神格化	オオカミ（犬ではない）	ライオン⇒ネコ
	⇩	⇩
人間社会との関係	社会内存在	社会外（境界）存在

2.4　なぜいま猫なのか――人新世（アントロポセン）とグレート・アクセラレーション（大加速）

さて，ここまで猫ブームを，背景となる社会の人口の増減と結びつけて考えてきた．しかし，この人口の増減は，近年提唱されている新たな地質年代との関係で考えることもできる．

フランスの現代思想家F.ガタリは，「地球という惑星は，いま，激烈な科学技術による変容を経験しているのだが，ちょうどそれに見合うかたちで恐るべきエコロジー的アンバランスの現象が生じている．このエコロジー的アンバランスは，適当な治療がほどこされないならば，ついには地上における生命の存続をおびやかすものとなるだろう．こうした激変と並行して，個人的かつ集団的な人間の生活様式もしだいに悪化の一途をたどっている」（Guattari 1989，訳書：９）」と述べている．

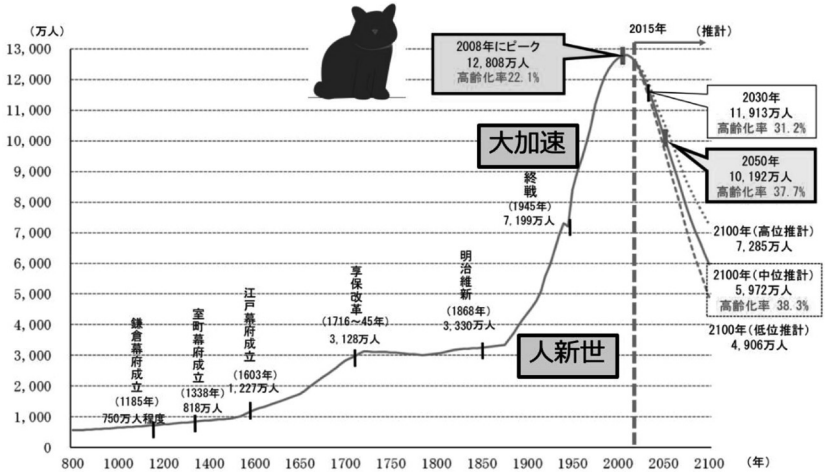
これと関連して，近年，地質学の分野から，「人新世」（アントロポセン）という年代区分が提案されている．「人新世」の定義については，まだ未確定であるが，12000年前頃から始まった，人類文明の繁栄期である「完新世」の後，または最後に位置づけられる時代である．図73に見られるように，人間たちが農耕を開始して繁栄を始めた時期，即ち完新世に，地球の温度がそれ以前に比べて高いレベルにシフトしている．完新世における様々な変化を見ると，18世紀後半以降，すなわち産業革命以降，それ以前に比べて変化の速度が加速されている．このことは，世界人口のグラフを見るといっそうはっきりする．また図５は，日本の人口推移であるが，日本では，明治以降の近代化（すなわち産業革命の導入）によって，やはり，人口の爆発的増大が起こっていることがわかる．ここから，「新人世」は，18世紀半ばから19世紀半ば以降の時代を指すと考える研究者が多い．

ただし，図10を見ると，1950 ～ 1960年代以降に，もう一段階，変化の速度が変わっているように観察される．また図＊からも，1960年代以降に，陸海温度の変化が進んでいることがわかる．そこで，この1960年代以降の変化を「大加速（Great Acceleration）」と呼ぶ．そして，「大加速」以降の年代を「人新

世」と考える研究者もいる．1950 ～ 1960年代とは，すなわち，コンピュータが実用化され，社会の情報化が急速に進んだ第３次産業革命の時代に該当する（図73）．

人新世は，地球への4つの圧力によって特徴付けられる．人口増加と豊かさの追求，気候変動，生態系の急激な破壊，地球環境の突然，不可逆的，広範な変化のリスク，という四つの圧力である．

我々の現代は，人口カーブの転換点というだけでなく，このさらにマクロな世界変化の転換点と考えることもできるのではないだろうか．



（出典）1920年までは、国土庁「日本列島における人口分布の長期時系列分析」（1974年）、1920年からは総務省「国勢調査」。なお、総人口のピーク（2008年）に係る確認には、総務省「人口推計年報」及び「平成17年及び22年国勢調査結果による補間補正人口」を用いた。2020年からは 国立社会保障・人口問題研究所「日本の将来推計人口（平成29年推計）」を基に作成。

図10　我が国における総人口の長期的推移（出典：「国土の長期展望」最終とりまとめ 参考資料（令和３年６月国土審議会計画推進部会国土の長期展望専門委員会））https://www.mlit.go.jp/policy/shingikai/content/001412278.pdf

３．歴史上，〈猫〉ブームは何度か起きている

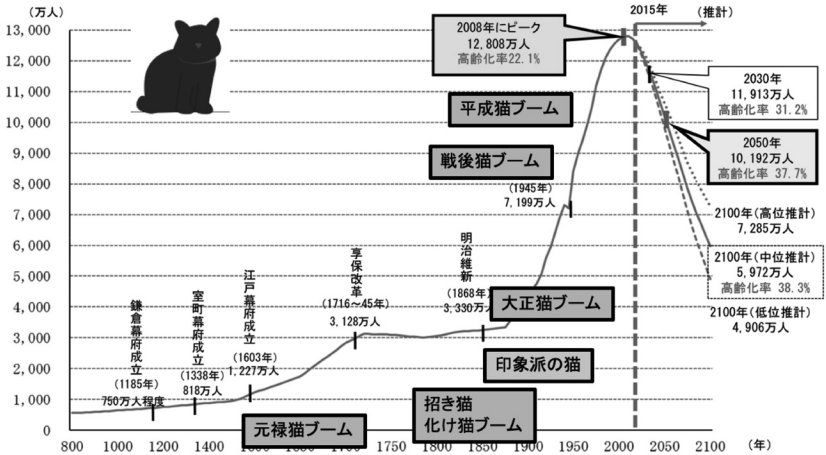
3.1　歴史上の猫ブーム

ただし，歴史上，〈猫〉ブーム的なものは，何度も起きている．（もちろん，

境界としての〈猫〉―ポストヒューマンの時代に「猫と生きる」とはいかなることか何をもって「ブーム」と呼ぶかは曖昧であるが）．その代表的な例を図11に示す．

そして，ここからも，〈猫〉ブームが，人口増減曲線の変化する時期――あるいは大きな社会変化と同期していることが推測される．

この章では，その中から，いくつかを取りあげて論ずることとする．



（出典）1920年までは、国土庁「日本列島における人口分布の長期時系列分析」（1974年）、1920年からは総務省「国勢調査」。なお、総人口のピーク（2008年）に係る確認には、総務省「人口推計年報」及び「平成17年及び22年国勢調査結果による補間補正人口」を用いた。2020年からは 国立社会保障・人口問題研究所「日本の将来推計人口（平成29年推計）」を基に作成。

図11　歴史上の猫ブーム

3.2　幕末～明治維新の招き猫／化け猫

日本では，幕末から明治維新にかけて，大きな社会変動があったことは周知である．そしてその時期は，日本的には，人口爆発のスタートポイントであり，世界的には，人新世の開始点とほぼ一致するのである．

この時期，日本では，猫の浮世絵ブームがあり，招き猫ブームがあり，化け猫ブームがあった．

遠藤（2015，2023）でもみたように，江戸では，浮世絵や絵双紙などを介して，「猫」は人気のファッション・アイコンとなった．江戸末期，「猫」キャラクターは，さらに別のかたちでも江戸の人気を集めることになった．「招き猫」である．

「招き猫」は，江戸後期，都市部を中心につくられはじめたとされる．後で

も述べるが，当時江戸では，「招き猫」は一時的な流行で，すぐに廃れると考えられていたようだ．

しかし，「招き猫」はさまざまに形を変えつつ，今日でも店頭の飾り物として，あるいは，愛らしいマスコットとして，さまざまなかたちで商品化されている．

江戸期に人びとの話題に上ったのは，人間に恩返しする「招き猫」の噂ばかりではなかった．人間に復讐する恐ろしい化け猫たちの物語もまた，大いに人気を博したのである．

なかでも，有馬の猫騒動，鍋島猫騒動，岡崎の猫騒動は，「三大猫騒動」として講談や歌舞伎を通して語られた．いや，むしろ，講談や歌舞伎を通じて創り出された，というべきだろう．これらの物語については，当時の人びとでさえ，それが「事実」であるとはまったく思っていなかったようである．

人びとは，いわば「フェイクニュース」であると知りながら，「もう一つの真実（オルタナティブ・ファクト）」を恐れ，また楽しんだといえるだろう．

江戸期「招き猫」現象は，当時の社会環境と始原的世界観，局所固有性（土着性）と普遍性（世界共通性）が，複合的に衝突する地点で発生したものであるということである．そして現代，江戸期とは時代状況が異なるものの，同じような社会文化的衝突のなかで「招き猫」ブームが生成されているのではないだろうか．

このような見方は，「猫ブーム」を通して，私たちの社会における「流行」とその未来をあらためて見直すきっかけとなるかもしれない．それとともに，〈猫〉の表徴による暗示的・文化的な社会的正義の主張は，同時代の西欧諸国で近代への移行期に起こった「市民革命」とどのように違い，それが現代にまでいかなる潜在的な軋轢を生んでいるかということについても，私たちは繰り返し考える必要がある．

遠藤（2015，2023など）でも述べたように，江戸期浮世絵は，源氏物語の女三の宮と柏木の物語を重要なモチーフの一つとして発展した．人に姿を見せない女三の宮（光源氏の妻）を，猫の悪戯でかいま見てしまった柏木が，その猫を口実に女三の宮との禁じられた恋に陥る物語である．図12や図13は，

美しい女性の裾に戯れる猫の姿を描いて，うっすらと恋の香りを表現している．

一方，日本では長い間猫は富貴の人びとが愛玩する高価な動物であったが，江戸期になると，政策的に猫が地域の共有動物のようになった（遠藤前掲書参照）．そのため，庶民の日常生活でも猫派馴染みの存在となった．図14や図15は，子どもたちのコンパニオン（遊び友だち）としての猫が描かれている．

図12　春信「女三の宮」ボストン美術館蔵（1767）

図13　歌麿

図14　春信「猫と鼠」（1768）

図15　歌麿（1768）

浮世絵師たちは，猫の動きの魅力に取り憑かれ，錦絵に描くだけでなく，多くのスケッチを残している（図16～18）．

図16　北斎『三体画譜』（1815）

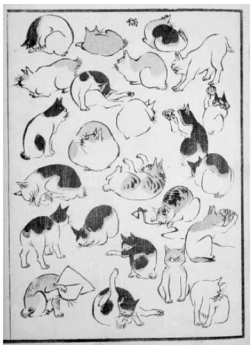


図17　広重『浮世画譜』

図18　国芳『猫飼好五十三疋』

幕末になると，社会は大きな動乱期に入った．人びとは，こぞって流行神に参詣したり，「世直し」の踊りに身を投じたり（図20）した．そんな中，猫も福神「招き猫」（図19）になった．

他方，猫が化けて主の復讐を遂げる「化け猫」の物語（図21）も，多くの人を熱中させたのだった．

図19　さまざまな招き猫（遠藤蔵）

図20　幕末の「ええじゃないか」の狂騒（河鍋暁斎，1867）

図21　梅堂豊政　怪猫芝居絵　明治時代（遠藤蔵）

3.3　マネのオランピア――印象派・ジャポニズム・猫

19世紀半ば以降，大きな時代の転換に直面したのは，日本だけではなかった．「黒船」として日本に脅威を与えた欧米諸国も，産業革命，市民革命などの大きなうねりの中にあった．「人新世」がまさに始まろうとしていたのである．

このような社会変動期にあって，文化・芸術の分野も当然，新しい動きを

始める．

その先駆けの一人が，エドゥアール・マネ（1832−83）だった．マネは巴里の富裕な家庭に生まれたが，画家を志し，サロン・ド・パリへの応募を続けた．1963年の落選展に『草上の昼食』を出品すると，風紀に反すると批判を浴びた．1965年には『オランピア』（図22）を出品し，さらに大きな批判を浴びることとなった．

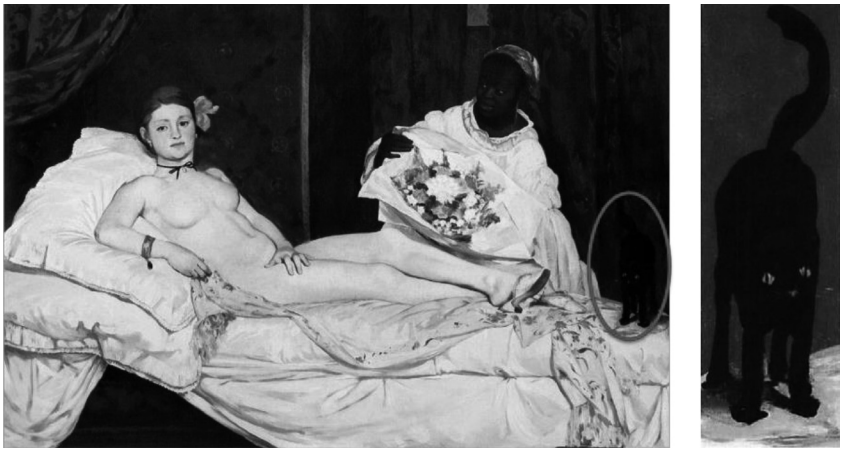


図22　マネ『オランピア』（1863年，オルセー美術館）

マネの「オランピア」が，ティツィアーノの「ウルビーノのヴィーナス」（図23）を下敷きにしていることはよく知られている．しかし，「ウルビーノ」が絶賛を浴びたのに対して，「オランピア」に浴びせられたのは酷評の嵐だった．同じように横たわる女性の裸体を描いたにもかかわらず，ティツィアーノが賞賛され，マネが批判されたのは，前者が裸体に対する文化的規範に（少なくとも表面上）準拠しているのに対し，マネが（意図的か非意図的かは別として）それに背反したからであるというのが通説である．すなわち，前者はボッティチェリ（図24）の伝統に従い，裸体を神話的･宗教的文脈において描いている（少なくとも形式上）に対して，後者は，まさにその絵が描かれた時点を生きている世俗の女性の肉体を描いている，という点で両者は大きく異なるのである．

実際，「ウルビーノのヴィーナス」は，それよりやや早く描かれたとされるジョルジョーネの「眠れるヴィーナス」（図25）の構図に似ている．ただし，ジョルジョーネがヴィーナスは眠っており，背景には神話的風景を描いているのに対し，ティツィアーノのヴィーナスは彼女の寝室のベッドから誘うようなまなざしをこちらに向けており，背景も部屋の外の様子である．

同じ時期，ボントルモも，「ヴィーナスとキューピッド」（図26）を描いている．この絵はミケランジェロが描いた（失われた）絵画を，ボントルモが複製したものであるといわれる．ヴィーナスとキューピッド（ヴィーナスの息子）の恋の情景を描いたものだが，当時の検閲によってヴィーナスの裸体は布を上書きすることでによって隠された．この絵が再発見されたのは19世紀半ばであり，最終的に本来の裸体に戻ったのは2002年だという．

図23　ティツィアーノ
『ウルビーノのヴィーナス』（1538年頃）
ウフィツィ美術館

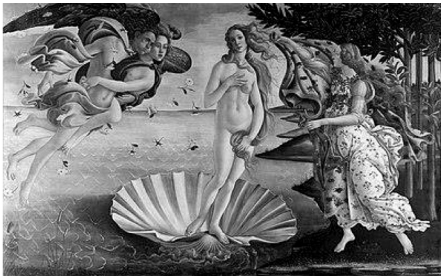


図24　ボッティチェリ「ヴィーナスの誕生」
1483

図25　ジョルジョーネ
『眠れるヴィーナス』　1510頃
アルテ・マイスター絵画館所蔵

図26　ポントルモ
『ヴィーナスとキューピッド』　1533
アカデミア美術館（フィレンツェ）

図27　ミケランジェロ
「レダと白鳥」（模写）1530

図28　ティツィアーノ
『ダナエ』1544　国立カポティモンテ美術館

図29　ティツィアーノ『ダナエ』1553－4
国立カポティモンテ美術館

図30　レンブラント『ダナエ』1636

図27は，ミケランジェロが描いた「レダと白鳥」の模写である（原作品は逸失）．レダはスパルタ王妃で，ギリシア神話のゼウスがレダに恋をし，白鳥となって交わったとされる．「レダと白鳥」は多くの画家によって描かれている．レオナルド・ダ・ヴィンチも描いたが，それも逸失し，他の画家による多くの模写が残されている．

類似の画題として「ダナエ」がある．「ダナエ」とは，ギリシア神話の王女で，ゼウスが黄金の雨となって彼女と交わり，英雄ペルセウスが生まれたとされる．ティツィアーノ自身も『ダナエ』という作品を何枚も描いていて（図28, 29），その図柄は『ウルビーノのヴィーナス』ともかなり似ている．ティツィ

アーノの作品では，ゼウスの黄金の雨は金貨として表現されており，図28ではキューピッドが驚いているが，図29では金貨を袋で受け止めようとしている老女が描かれている．また,左下には（図23と同様）犬がうずくまっている．

図30はレンブラントの手になる「ダナエ」であるが，ティツィアーノのダナエたちがゼウスの訪問を従順に受け容れているのに対し，レンブラントのダナエは，異変に警戒を表している．おそらく，ティツィアーノにおいては，ヴィーナスとダナエは，神話世界の枠組みを借りつつ，同じ特性をもつ女性像が暗示されている．すなわち，美しく上品な容姿をもちつつ，黄金の力によって，容易に放埒に身を任せる女性である．

これに対して，マネの「オランピア」の女性は，実際にモデルは高級娼婦であり，また「オランピア」とは当時高級娼婦の名として多く使われた名称であることなどから，ティツィアーノが暗に示した状況をまさに白日の下にさらけ出すものだった．しかも女性は，決して従順そうではなく，むしろ意思的に口を引き結び，挑戦的にこちらを向いている．そのことが，この女性に対して，「「黄色い腹のオダリスク」「雌ゴリラの一種」「ホッテントットのヴィーナス」といった酷評や罵倒」（三浦：57）が投げつけられる原因があったといえよう．

フーコー（2004=2019）は，この点に関して次のように述べている．「《オランピア》の裸体に向かい合って，それを照らし出しているのはわれわれの視線にほかならない．…（中略）…われわれが《オランピア》の可視性と裸体に責任があるのです．…（中略）…このような絵においては作品を見ることとそれを照らし出すことがひとつの閉じことでしかなく，それゆえわれわれは――すべての鑑賞者は――必然的にその裸体に巻き込まれ，ある程度までそのことに責任を持たされてしまう．このような次第で，ひとつの美学的な変化が，こうした場合には，道徳的スキャンダルを引き起こしてしまう」（訳書63-4）のであると．

3.4 「オランピア」におけるジャポニズムと猫

「オランピア」で目を引くのは，右端にいる「黒猫」である．ティツィアーノでは犬が描かれているところに，猫が描かれており，犬が眠っているのに対して，猫は大きな目を見開いている．この犬が何を寓意しているのかについては諸説ある．「犬は貞節を表している」,「犬は貞節を表しているが，眠っている（貞節の否定)」「犬は放埒を表している」など相反する議論がある．一方，猫については,「異端」「欲望」「挑戦」など，少なくとも既存の規範に対する何らかの逸脱を表現という意味では，論者たちの意見は一致しているといえよう．このように,「オランピア」が西欧美術の系譜上に位置づけられるのは当然であるが，一方で，筆者は，日本文化との関係に興味を惹かれる．

マネは, 後述もするが, 日本の浮世絵や伝統絵画にも深い関心をもっていた．図31は，女性の背景に日本の団扇を装飾的に描いた作品である．この絵もそうだが,「オランピア」や, 有名な「笛を吹く少年」(図32）に見られるような，べたっと平面的な背景は，西欧の立体感を出した描き方とは異質で，浮世絵の影響と考えられている．

図31　マネ『婦人と扇』[（1873－74）

図32　マネ
「笛を吹く少年」(1866)

であるとすれば,「オランピア」の「猫」も，浮世絵との関係で考えることも可能ではないだろうか．

図33は，勝川春章（1726-1792）による春画（元絵は1788年刊）であるが，猫の姿，配置が（左右逆ではあるが）「オランピア」と相似している．また，図34は，鈴木春信による春画の一部だが，ここでも，人間の男女とともに，交合する猫の姿が描かれている．日本においては，『源氏物語』以来，「恋」のアイコンとして文芸にも美術にも用いられている．一方，官能的な情熱の表現に対してもキリスト教的な神秘化の強制はなかった．そのある意味での世俗的「自由さ」が，「オランピア」の猫にも繁栄しているかもしれない．（マネが実際にこれらの浮世絵を見たかについて，筆者は確認していない．しかし，浮世絵はかなり早い時期からヨーロッパに渡っており（小林忠），勝川春章についても最初の研究書は大正期にドイツで出版されている（林1991）ことなどを考えれば，あながちありえないことではないだろう）．

図33　會本喜師の姫松（勝川春章）

図34　『風流艶色真似ゑもん』（鈴木春信 画）

3.5　ルノワールの猫

貧しい仕立屋の子として生まれたルノワール（1841－1919）は，20歳で画家になることを決意し，モネやシスレーと交流した．ルノワールも初期にはジャポニズムの影響下にあり，「団扇をもつ少女」（図35）のような絵を描いている．

ルノワールによる最もスキャンダラスな猫の絵は，「猫と少年」（図36）だろう．美貌の少年が，服を着けぬまま，猫を抱きしめ，こちらを振り返っている．シーツの花模様を含めて，どことなく「オランピア」を連想させると

みるのはうがち過ぎだろうか．ルノワールは猫の絵を多く残しているが，時を経るにしたがって画風が穏やかになっており，「猫」もスキャンダル性よりも愛らしさや穏やかな生活を表すアイコンとして用いられることが多くなっている．たとえば，図38などは，後期ルノワールの代表的な猫絵画であろう．とはいうものの，図37の「猫と眠る少女」などは，図38よりあとに描かれたものだが，胸元のはだけた少女が安楽椅子にもたれて眠ってる姿をえがいて，かすかに「オランピア」の雰囲気を漂わせている．

図35　ルノワール「団扇をもつ少女」(1879)

図36　ルノアール
「少年と猫」(1868-69)
オルセー美術館蔵

図37 「猫と眠る少女」
(1880)
クラーク美術館蔵

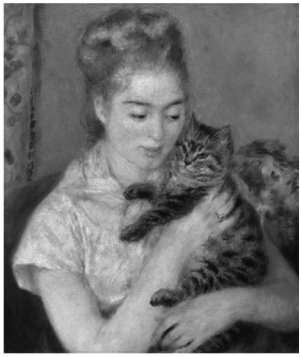


図38 「猫と女性」(1875年)
ワシントン
ナショナルギャラリー蔵

3.6　ゴーギャンのオランピア

ポスト印象派の代表的画家の一人とされるゴーギャン（1848－1903）もジャポニズムを取り入れた画家の一人である．同様に浮世絵を研究したゴッホと一時共同生活をおくったことでも知られる．その後，タヒチに渡り，現地での生活の中で，プリミティズムとも呼ばれるスタイルを確立した．

ゴーギャンは，1891年にマネの「オランピア」を模写している．そしてその翌年に書いたのが，「死霊が見ている」（図39）である．三浦（2018）によれば，「ある日のこと，パベーテから自宅に戻るのが深夜になったゴーガンは，真っ暗な部屋のベッドの上で恐怖に怯えている妻テウラを見つけ(240-1)」,「聞の中で死霊(トゥパパウ)に怯えていたテウラの姿に，それまで知らなかった異質の存在を見るゴーガンの衝撃がこの裸婦像に結実した」（241）とし，その背後に「オランピア」のイメージが介在していると論じている．ここには猫は描かれてはいないが，画面左の黒い死霊がそれにあたるのではないか．また，1897年に描かれた「ネヴァモア」（図40）も同様の構図である．

同年から翌年にかけて描かれた「われわれはどこから来たのか　われわれは何者か　われわれはどこへ行くのか」（図41）では，中央に二匹の猫が描かれている．

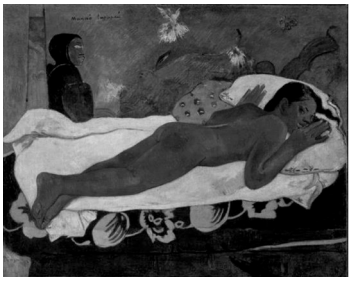


図39　ゴーギャン『死霊が見ている』
1892年
オルブライト＝ノックス美術館

図40　ゴーギャン『ネヴァモア』
1897年
コートールド美術研究所

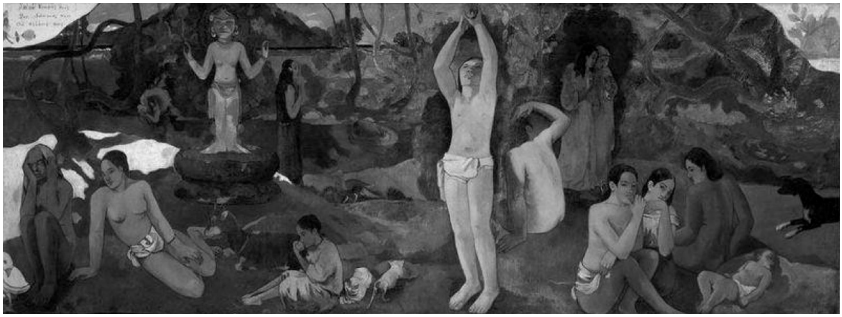


図41　『われわれはどこから来たのか われわれは何者か われわれはどこへ行くのか』
1897－1898年．ボストン美術館．（中央に二匹の猫が描かれている）．

存在論的な思索を表現した上記の一連のシリーズとは別に，ゴーギャンは，図41や図43のような猫の絵も描いている．思わず笑みがこぼれる愛らしい猫たちの姿である．

図42　ゴーギャン
『ミミと彼女の猫』
1889年　個人蔵

図43　ゴーギャン『猫のある静物』
1899年　ニイ・カールスベルグ・
グリプトテク美術館 コペンハーゲン

3.7　スタンラン，ヴァロットン，ビアズリーの猫たち

先にも述べたように，マネは，日本の美術に深い関心をもっていた．図44は，マネのエッチングによる「猫」だが，彼が北斎や広重らのデッサン（図16～18）を参考にしていたことがうかがわれる．

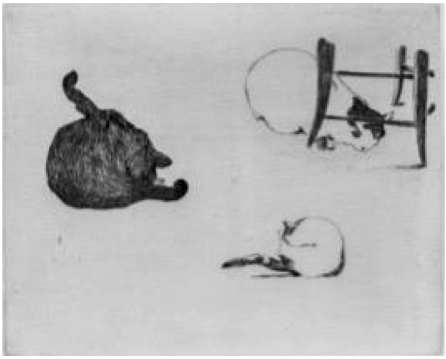


図44　猫（「マネ，30点のオリジナル・エッチング集」より）（東京富士美術館蔵）

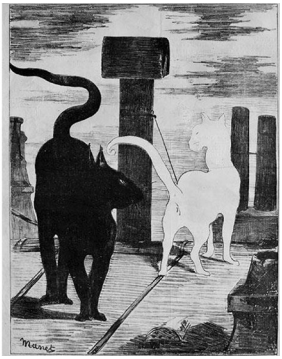


図45　マネ「猫のあいびき」シャンフルーリ　『猫たち』の宣伝用ポスター（1868）

テオフィル・アレクサンドル・スタンラン（1859－1923）は，スイスのローザンヌで生まれ，20代でパリに出た．キャバレー『ル・シャノワール（黒猫）』に集まる芸術家たちとの交流を深め，この時期に描いた図46に示したポスターがよく知られている．彼も猫のデッサンを多く残している．図48は，歌川国芳の「金魚づくし　百物語」を思い出させる．（スタンランは，「黒猫が金魚鉢を見つけて興味をもち，中を覗き込む内金魚鉢の中に堕ちてしまうが，何とかはい出す．そのとき金魚鉢がひっくり返って，金魚たちは床に投げ出されてしまう」という一連の流れを，コミックのようにスケッチしている）．また図47は，黒猫が蛙を見つけて追いかける，という動きをやはり複数枚のスケッチで描いたものの一枚だが，北原白秋の『思ひ出　抒情小曲集』（1911）の挿絵の一つは，この絵のパロディと考えられる．世紀末のパリ画壇と日本の文化シーンは緊密な相互関係の中にあったことがうかがわれる．

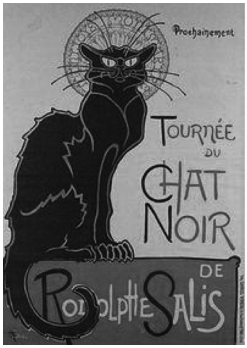


図46　スタンラン
『ルドルフ・サリスの「ル・シャ・ノワール」の巡業)』
（1896年）

図47　スタンラン
「猫と蛙」（1898年）

図48　スタンラン
「金魚の怖ろしい最後」
（1910年）

フェリックス・ヴァロットン（1865－1925）は，スタンランと同じくスイスのローザンヌに生まれ，パリに移って，活動した．白と黒のシャープなコントラストを活かした木版画で知られる．当時のパリの芸術家グループと同様，彼も，印象派，象徴主義，ジャポニズムの影響を受けたといわれ，多くの浮世絵のコレクションももっていたといわれる．

図49は,「怠惰」という木版画であるが, ベッドシーツに横たわる女性と猫は,「オランピア」を連想させる．図50は版画ではないが，平面的に塗りつぶされた背景，ベッドに横たわる女性というやはり「オランピア」的な構図を取っている．

図49「怠惰」
（ヴァロットン，1896）

図50　「白と黒」
（ヴァロットン，1913）

ヴァロットンと同様，白と黒の鮮烈な表現によって，多くの後継者に影響を与えたのが，オーブリー・ヴィンセント・ビアズリー（1872－1898）である．ビアズリーはイングランドに生まれ，ロンドンにでて，挿絵画家として知られるようになる．とくにオスカー・ワイルド（1854-1900）の挿絵（図51）は高い人気を誇る．ビアズリーの絵には，ジャポニズムの影響が顕著とされるが，彼の影響を受けた日本の画家や漫画家も多い．

ビアズリーの猫の絵としては，エドガー・アラン・ポーの『黒猫』の挿絵（図52）が有名である．

ちなみに，ポーの『黒猫』は日本でも人気が高い．1893年に内田魯庵が翻訳している．内田魯庵は，猫好きとしても知られ，夏目漱石の『吾輩は猫である』にも登場する（遠藤2019，2023など）．

図51　ビアズリーによる
オスカー・ワイルド『サロメ』挿絵（1894）

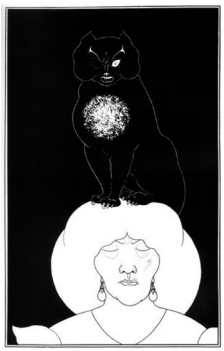


図52　ビアズリーによる
エドガー・アラン・ポー『黒猫』挿絵
（1894－95）

3.8　藤田嗣治・竹久夢二・中原淳一

第一次世界大戦前にフランス画壇で活躍した藤田嗣治（1886-1968）は，パリのモンパルナスに居を構え，ピカソ（1881-1973），モリディアーニ（1884-1020）ら多くの芸術家たちとの交流のなかで独自の芸術を創造していった．

藤田が1921年に描いた「横たわる裸婦と猫」（図53）は，その構図の類似性から，「藤田のオランピア」とも呼ばれている．この「横たわる裸婦と猫」の

あと，藤田は「横たわる裸婦（夢）」（1925，国立国際美術館蔵）（図54），「裸婦」（1927，ベルギー王立美術館蔵）など，同様の構図で多くの作品を描いた．

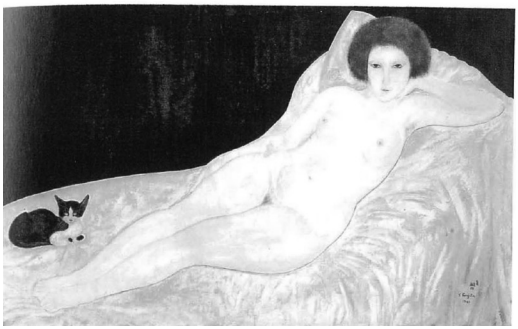


図53　藤田嗣治「横たわる裸婦と猫」
（1921，ジュネーヴ・プチ・パレ美術館蔵）

図54　藤田嗣治
「横たわる裸婦（夢）」
（1925，国立国際美術館蔵）

藤田はパリでキース・ヴァン・ドンゲン（1877－1968）とも交流が会ったようである．著書『巴里の昼と夜』（1948年）には，「ある年の同じ舞踏会でヴァン・ドンゲンと合作をしたことがあります．

それは，カジノ・ド・パリの若い踊り子二人がほとんど裸身のままで左右から１枚のカンバスを持ち合って立っている．そのカンバスの上に先ずドンゲンが油でサッと女を描く，僕は同時に猫を描くという趣向です．女が猫を抱くという構図で，二人同時に描き始め同時に描き終るという寸法ですよ．

それに，二人とも燕尾服ですからね．――燕尾服で生きた裸体の画架の上で油絵を描いた人間はおそらくこの世では僕とドンゲンだけでしょうね．予め打合せも何もなく遣ったのだが10分もかからずに出来上って，大喝采でしたよ」との思い出が綴られている．

この合作もそうだが，ヴァン・ドンゲンも，“猫と女”というテーマの絵を多く残している（図55）．

Woman with a Cat, 1908

Woman and Cats, 1912

Woman holding a Cat, 1930

図55　キース・ヴァン・ドンゲンが描いた“猫と女”

このキース・ヴァン・ドンゲンの「猫を抱く女」にインスパイアされたのではないかといわれるのが，竹久夢二（1884－1934）の「黒船屋」（1919）（図56　左端）である．竹久夢二は，岡山県邑久郡の代々続く酒造家に生まれたが，父が家業をたたんだことから，上京して画家の道に進んだ．「夢二式美人」とよばれる多くの美人画を残し，現在も人気が高い．

しかし，ヴァン・ドンゲンの「猫を抱く女」と夢二の「黒船屋」をくらべると，印象はかなり違う．全体のトーンはドンゲンの方が淡いパステル調だが，「黒船屋」は黄八丈の着物と女性の白い肌の対照性によって儚げな風情が醸し出されている．またドンゲンの女性が目を伏せているのに対して，黒船屋のまなざしはこちらに向けられているように見える．そして，ドンゲンの女性の方が薄着であるのに対して，黒船屋の女性は裾からわずかに見える足が官能的に感じられる．夢二は「黒船屋」以外にも，多くの「猫を抱く女」たちを描いている（図56）．

黒船屋(1919年)竹久夢二伊香保記念館所蔵

小説倶楽部. 5(3) [民衆文芸社] 1921-03

小説倶楽部. 5(11月特別戀愛問題號)(11) [民衆文芸社] 1921-11

女十題[6] （1937-38）

図56　竹久夢二が描いた“猫と女”[10)]

もっとも，「猫を抱く美女」という画題は，古くから多くの浮世絵で描かれてきたものである．図57に示すように，喜多川歌麿の「青楼六家楼」，国芳の「山海愛度図会　ヲゝいたい」など枚挙にいとまがない．明治に入っても，月岡芳年の「古今比売鑑」（1875），『風俗画報』などで活躍した山本昇雲（1870－1965）の「いますがた」など，時代を超えて書き続けられている．傍若無人に甘えかかる猫と身をよじって愛しげに猫を抱きしめる美女の取り合わせは，多くの人びとに好まれたのだろうか．

そして，こうした浮世絵の伝統を考えれば，竹久夢二はキース・ヴァン・ドンゲンの絵にも影響を受けたかもしれないが，浮世絵の図柄を継承したともいえるのではないか．そもそも，ヴァン・ドンゲンもジャポニズムの影響を受けた画家の一人であり，彼自身も浮世絵にインスパイアされた可能性も否定できないだろう．

先に見た藤田嗣治も「猫を抱く少女」を描いている（図58）．

一方，藤田や夢二を継承するように，魅力的な少女たちを描いたのが，中原淳一（1913-1983）だった．中原は，四国に生まれるが，早くに父を失って上京し，日本美術学校で学んだ．1932年から雑誌『少女の友』の専属画家と

10）NDLイメージバンク「夢二式美人」（https://rnavi.ndl.go.jp/imagebank/data/post-21.html）より

なり，1937年に川端康成「乙女の港」の挿絵によって大ブームを引き起こした．戦後は『ひまわり』，『ジュニアソレイユ』などの雑誌を創刊し，現在にいたる「カワイイ」文化の開拓者の一人として活躍した．図59は，中原の手になる猫と少女の図像である．

喜多川歌麿「青楼六家撰 扇屋花扇」ボストン美術館蔵　山海愛度図会　ヲゝいたい 一勇斎国芳 1852年（嘉永5）　古今比売鑑・薄雲，1875年（明治8），月岡芳年　いますがた [31] 昇雲 [画]　1909年（明治42）

図57　浮世絵における“猫と女”

図58　藤田嗣治の「猫を抱く少女」（1958）

図59　中原淳一が描いた“猫と少女”（版画）

中原は夢二の大ファンであったという．その中原に師事して，新しい少女像を生み出したのが，内藤ルネ（1932－2007）だった．内藤は愛知県岡崎市の青果店に生まれたが，1951年に中原の招きでひまわり社に招かれ，挿絵などを描くようになった．1971年にパンダ（熊猫）をキャラクター化した「ルネパンダ」（図60）を発表し，人気となる．

戦後日本の「カワイイ」少女文化は，この系譜から生まれたといえる．

その一方で，内藤は雑誌『薔薇族』（1971年創刊）の表紙も描いており，自身も同性愛者であると述べている．日本の少女マンガが文化が，「やおい」あるいは「BL」と呼ばれるジャンルを発展させてきた経緯については，また稿を改めて論じたい．

図60　内藤ルネデザインによる岡崎市のマンホール[11)]

3.7　戦後の猫映画～化け猫と野良猫

さて，遠藤（2023）でも論じたように，1950年代～ 60年代の映画黄金期の中で，化け猫映画ブームが到来した．主演を務めたのは，戦前，子爵東坊城家の令嬢から女優になったことで話題を呼び，清純なヒロインとして大人気を博していた入江たか子（1911－1995）だった（図61）．当時の状況を，入江は自著（1957）で次のように語っている．

> 大体八月の夏枯れはどこの映画会社も見切をつけ，お金のかからない軽い娯楽篇でごまかすのが常のようだが，昭和廿九年はデパートが捨て身の販売合戦をやり，一般会社はやりくり経営の結果が不渡小切手の乱発，どこもここもデフレで苦しんでいた時である．映画界も夏枯れでアキらめていたところ，大映がこの化け猫でバカ当りしたもので，商売仇の松竹，東宝，東映，新東宝さんたちも「全く判らないものだ」とあ然とされたという．昔から「映画は水もの」といわれているが，その昔新

11）CC BY 4.0　https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Okazaki_20201103-041.jpg

興キネマが不況のどん底時代に鈴木澄子さんの怪猫映画をつくったところ，物の見事に大当りで忽ち社運を挽回したというのであるが，「怪猫岡崎騒動」は夏枯れの浅草電気館が七日間で，二六，九玉〇〇人の観客を動員したということだ．（p. 222）

予想外の人気ぶりで，大映は次々と入江たか子主演の化け猫映画を世に送り出した．新聞は「往年の大スタア入江たか子は，猫映画の化け猫役で見事カムバック」（入江 1957:222）とかき立てた．戦後の化け猫映画は，映画「ゴジラ」（図62）に代表される特撮映画ブームへとつながり，現代まで接続する．（ちなみに，特撮映画の代表作の一つである『モスラ』について，小野（2007）は，モスラが蛾の怪獣であるところから，日本における養蚕業とのつながりを指摘している．猫が養蚕業の守り神としてあつかわれてきたことと考え合わせて，猫論の観点からも今後検討したい）．

図61　入江たか子主演「怪猫シリーズ」のポスター

図62　映画「ゴジラ」ポスター

戦後の社会では，「化け猫」ではなく「野良猫」という表象も，よく使われた．早い時期のものとしては，「野良猫」（森繁久弥・乙羽信子主演，1958，東宝，木村恵吾監督）がある．

一方，1970年に日活が製作した「女番長　野良猫ロック」（和田アキ子主演，1970，長谷部安春監督）は，アメリカン・ニューシネマの代表作『イージー・

ライダー』（1969）の影響を受けたともされ，若者たちの刹那的な生を描いて，カルト的人気を博し，野良猫ロック・シリーズとして５作がつくられた．これらの映画は，「日活ニューアクション」とも呼ばれた（図63）．

ちなみに，和歌研究者の兼築信行（2022）は，中世における「野良猫」を詠んだ歌として，室町時代中期の臨済宗の歌僧である正徹の「音をぞ鳴くなれしもしらぬ野良猫の綱絶え果つる中の契に」（1449），源仲正の「真葛原下這ひありく野良猫のなつけがたきは妹が心か」，平安時代末から鎌倉時代初期にかけての歌僧・寂蓮の「よそにだに夜床も知らぬ野良猫の鳴く音は誰に契りおきけん」を挙げ，これらから「強いて「本意」を抽出すれば，放縦不羈であるところは現代のそれに遠いものではない．面白いのは，一二首すべてが恋の主題を歌うのに用いられている点である」（p.53）と述べている．中世の「野良猫」は今日の「野猫」に近いが，そのイメージは時を超えて引き継がれている点が興味深い．

女番長　野良猫ロック
1970年　監督：長谷部安春
和田アキ子、梶芽衣子、和田浩治

野良猫ロック　ワイルド・ジャンボ
1970年　監督：藤田敏八
梶芽衣子、藤竜也、地井武男

野良猫ロック　セックス・ハンター
1970年　監督：長谷部安春
梶芽衣子、安岡力也、藤竜也

野良猫ロック　マシン・アニマル
1970年　監督：長谷部安春
梶芽衣子、藤竜也、岡崎二朗

野良猫ロック　暴走集団'71
1971年　監督：藤田敏八
原田芳雄、梶芽衣子、藤竜也

図63　日活『野良猫ロック』シリーズ

3.8　その後の猫たち

その後も，〈猫〉たちはさまざまに世界を賭け続けている．

1967年から『週刊少年マガジン』でレギュラー連載となり，1968年からアニメ化もされた『ゲゲゲの鬼太郎』（水木しげる）に登場する「猫娘」は，サブキャラながら多くのファンを獲得した．

1969年に藤子・Ｆ・不二夫はネコ型ロボット・ドラえもんを生み出した．その人気は，作者が亡くなった後も衰えることがない．

1974年にサンリオが開発した猫のキャラクターである「ハローキティ」は，

レディ・ガガなど海外のアーティストにも愛され，「カワイイ」の世界的代名詞ともなっている．

1978年から1987年まで『LaLa』（白泉社）に不定期連載された『綿の国星』（大島弓子）は，「私は自分を人間だと思っているので，この姿で登場します」というチビ猫の視点から日々の生活を描いた作品で，高い評価を受けた．ちび猫のあまりの愛らしさが，一九八〇年代に入っての「猫耳」ブームが始まったともいわれる．

1980年代には，特攻服を着て「なめんなよ」とすごむ「なめ猫」も人気を集めた．

2000年代は和歌山電鐵貴志川線貴志駅のたま駅長がブームを引き起こした．

興味深いのは，一口に「〈猫〉ブーム」といっても，登場する猫キャラクターたちは実に多種多様で，可愛いだけじゃない．ひねくれていたり，達観していたり，意地悪だったり……，まさにその多様さが「〈猫〉ブーム」を創り出しているのである．

そのせいもあってか，ここに挙げた個別の〈猫〉ブームは，実は終わることなく，社会のなかに蓄積している．しかも世界中でである．それぞれが変化しつつ，ある種の文化遺産のように，繰り返し思い出され，新たなブームを創り出すのである．

図64　村上隆のアート（CC by 4.0）[12)]

12）Art present in the exhibition "Flowers & Skulls" by Takashi Murakami, exhibited at the Tomie Ohtake Institute (São Paulo).（https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Instituto_Tomie_Ohtake_34.jpg?uselang=ja）

たとえば現代アートの村上隆（1962－）は,「ハローキティ」や「ドラえもん」などのキャラクターを使った表現で，世界的評価を得ている（図64）．奈良美智（1959－），増田セバスチャん（1970－）らも，「カワイイ」キャラクターをアートとして再創造しているといえる．（遠藤2021参照）．

3.9　ネット上の不機嫌な猫たち

そして2010年頃から，本稿第２章でも述べたように，大きな猫ブームが訪れている．それはネット上でも観察される．YouTube，instagram，TikTok などには，愛らしくも不思議な猫動画があふれている．

考えて見ると，ネットと猫は相性がいいのかもしれない．ネットの初期の頃から，様々なネット猫たちがアイドル化した．たとえば，二〇〇〇年代に流行したLOL キャット（LOL とは,「大笑い」を意味する略語）と呼ばれるのは，人間みたいな振る舞いをしている猫の画像におかしな説明文を付けた投稿で，思わず笑ってしまう．たくさんのLOL キャットが投稿され，広く拡散され，共有された．

2010年代には「グランピー（気難しい）・キャット」とか,「リルバブ」が人気アイドルとなった．グランピー・キャットは，アリゾナで飼われていたメス猫で，ひどく不機嫌そうな表情がネットユーザーを夢中にさせた.「リルバブ」も飼い猫で,「永遠の子猫」とも呼ばれる幼顔が人びとを魅了した．アイドル猫たちの画像や動画はネット上で大量に拡散されるだけでなく，商品化されもした．

日本では，まるという猫が世界的にも有名になった．まるは，興味を持つと猪突猛進，段ボールにダッシュで突っ込んだり，大きすぎる箱によじ登って飛び込んだり，小さすぎる箱に何とか身体を収めようと苦闘したり，……可愛すぎる．

もっとも日本でのネット猫のパイオニアは,「モナー」だろう．モナーは，誰が最初に創りだしたのかもわからない文字絵の猫で,「おまえモナー」と突っ込みを入れてくる．旧2ちゃんねるのマスコットキャラクターである．ネットユーザーたちは，モナーを自由にアレンジしたり，物語化したりして楽しんだ．

猫に限らず，ネットでは，広く拡散し，みんなに愛され，語られたり，二次創作されたりするものがしばしば現れる．そんな現象を「ミーム」と呼ん

だりする．ミームが興味深いのは，愛好の対象そのモノを個々人が所有するのではなく，みんながその面白さを共有することが楽しさを生む，という点である．だから，共有する人が増えれば増えるほど，面白さ，楽しさも増える．だから，未完成なもの，みんながそれぞれに自分の思いを託せるミームが，爆発的な流行となったりもするのである．猫がネットで人気を呼ぶのは，不機嫌にも見えるその無表情さのせいかもしれない．

こうして，文化としての〈猫〉は，人間たちの歴史とパラレルな〈猫〉たちの歴史とが交差するところから創造され，積もっていく雪のように，私たちの世界の古層を形成してきたし，これからも形成していくのである．

4．そして現在・・・災禍の時代

4.1　猫を棄てる

最近，村上春樹氏が『猫を棄てる』という本を出版した．タイトルに惹かれて，久しぶりに村上さんの著書を読んだ．なぜ惹かれたかといえば，私自身の記憶，とくに猫に関わる想いのなかで，「猫を棄てる」という事態が，非常に大きな意味をもっているからである．そして，村上氏の書かれている幼い時期の記憶は，まさに私の感覚と非常に共振するものであった．それは，一つは「猫を棄てる」行為が呼び覚ます罪の意識である．そしてもう一つは，私たちが「猫に棄てられる」という無力さの意識である．このような対称性は，猫との関係に特有の感覚であり，人間存在の原罪性とも関わる感覚であると感じさせられるのである．（図66に示した『猫を棄てる』の表紙はその感覚をよく表現している）．それが筆者の猫社会学の出発点でもある．

図66　村上春樹『猫を棄てる』（文藝春秋）表紙

4.2　災害と遺棄された動物たち

この感覚が改めて強く呼び覚まされたのは，2011年に起きた東日本大震災とそれにともなう福島第一原発事故だった．これらの災禍によって，人間だけでなく，多くの動物たち，とくにウマや牛，鳥，犬猫など，人間と生活をともにしていた動物たちが，大きな影響を受けた．災害の衝撃があまりにも大きかったため，それらは必ずしも十分な注目を集めなかったが，災禍の記録の一部に，まるで壁のしみのように，その痕跡が残された．

たとえば，2011年５月15日にEテレで放送された「ETV特集　ネットワークでつくる放射能汚染地図」は，立ち入り禁止地区に入って，放射能汚染の実態を調査，記録，報道したことで大きな話題となった．そのフィルムには，生活を奪われた人間たちや汚染された自然環境のなかで，やはり大きな影響を受けた動物たちの姿があった．同番組によれば，「五月十二日になって原子力災害対策本部長から福島県に対して，当該家畜の所有者の同意を得て，安楽死処分すべしという内容の指示」⇒，ブタ三万頭，ニワトリ六八万羽が殺処理，ウシ三五〇〇頭」であり，「福島県の推定によると，警戒地区には一万匹程度のイヌがおり，事故後，飼い主と避難できたのが三〇〇匹ほど，四分の一ほどは津波や地震で死亡，取り残されたものが七〇〇〇匹程度」だという（図66～67）．

前日まで人間たちと少なくとも表面上「共生」関係にあった動物たちは，

図66　殺処分される家畜（ETV特集）

図67　死に絶えた鶏たち（ETV特集）

放射能汚染などの理由によって，餌を与えられなかったり，あるいは処分されたりして，死に至った．また，多くのペットたちが，飼い主たちが避難した後に，取り残された．去って行く飼い主の後を追おうとするペットたちの姿は，あまりにも切ない光景であった（図68 ～ 69）．

図68　取り残された猫（ETV特集）

図69　去って行く飼い主の自動車を追う犬（ETV特集）

その後時間は流れたが，復興は必ずしも順調に進んでいるとはいえない．その後，筆者も現地を訪問したりもしたが，無人の被災地は，原生の森へと戻りつつあるように見えた．また取り残された動物たちは，野生に還って行きつつあるといわれる．

2016年12月19日，日本テレビ系列で，ＮＮＮドキュメント「その哭き声が聞こえるか～避難区域の動物たち～」が放送された．震災後５年を経ても住民の帰還の進まない町で，野生に還る動物たちの姿が画面に映し出された．図70にいくつかの場面を示した．無人の町を闊歩するイノシシ，罠にかかって暴れるアライグマ，人間に吼えかかるかつての飼い犬，歯を剥き出し，人間を威嚇するかつての飼い猫など，動物たちと人間たちの関係が壊れてしま

図70　ＮＮＮドキュメント「その哭き声が聞こえるか」の場面（左上：無人の町を闊歩するイノシシ，右上：罠にかかって暴れるアライグマ，左下：人間に吼えかかるかつての飼い犬，右下：歯を剥き出し，人間を威嚇するかつての飼い猫）

ったことを示している．とくにこの猫の姿は，猫に期待される「愛らしさ」とはほど遠い，凶暴な表情を見せており，悲しい（図70右）．

筆者は，これらの状況に非常にショックを受けた．ショックの理由は，これらの映像から，次のような事態を感じたからである．

第一に，人間と野生動物の間の暗黙の結界が破られたことがある．巨大な地震，そして原発の危機は，人間と家畜の間の保護幻想を破綻させた．人間側の視点からいうなら，人間とペットの間の疑似家族幻想が破棄された．この事態は，南極犬タロ・ジロや忠犬ハチ公とは異なることに注意する必要がある．

それは，人間と動物の間の〈他者性〉が剥き出しにさらされたということであり，〈他者性〉は，食糧や住処をめぐる〈敵対性〉へと転換可能である．それはまた，動物と人間との〈等価性〉をも意味する．デリダの『動物を追う，ゆえに私は動物である』はそれを示唆しているかもしれない．

大震災によって，人間もまた，自然によって，あるいは文明によって，なすすべもなく無数の死を与えられた．バイイは，“家畜が死ぬみたいに人間も

死ぬのだ”と述べたが，まさにその事実が白日の下にさらされたのだった．

4.3　コロナ禍と動物たち

東日本大震災から10年経った現在，私たちの社会はコロナ禍の渦中にある．

そもそもコロナ禍が発生した背景には，近代化の進行にともなうさまざまな現象，グローバリゼーション，気候変動，人口爆発，自然との境界の曖昧化などがある．そしてコロナ禍への対処のなかで，私たちの社会は，個々人が相互のつながりを抑制され，孤立して疫病に立ち向かわねばならない状況を生み出しました．また，アガンベンの言葉を借りれば，「私たちはいま，西洋政治史における一つの時代の終わりを生きています．その時代とは，憲法，諸権利，議会，権力分立にもとづいたブルジョワ民主主義の時代のことです．（中略）バイオセキュリティ体制において民主主義的な政治パラダイムがいかに深刻な変容を被ったかは，ただ一つの例を挙げるだけで明らかに示されると思います．ブルジョワ民主主義においては，すべての市民は「健康権」をもっていました．この権利がいまや，人々の気づかぬうちに，いかなる対価を払っても果たすべき，健康への法的義務へと顛倒してしまっています．その対価がどれほど高いものかは，市民が従わされた，先例のない外的措置を通じて見られたとおりです．」（Agamben）

筆者の行った社会調査でも，コロナ禍が人びとの社会活動を抑制し，それが心身に負担を強いていることがわかっている．

このような孤独感のなかで，ペット需要が高まっているとも報じられている．しかし，人間が癒しを求めてペットを求めることは，ペットの安易な廃棄にもつながりかねない．思った通りではなかった，面倒だ，などの安易な理由で遺棄される犬や猫の数も増えていると報じられている．

同時に，このようないのちに対する態度は，人間に対しても向けられる．コロナ重症者に対するトリアージや，中症者の入院拒否など，十分な議論がなされぬままに実施されることも危惧される．また，他者のいのちを根拠もなく「生きるに値しない命」として奪う犯罪も頻発している．さらには，自

分自身の命を奪う自殺者数も増えている．バイイの言葉が再び思い出される．“家畜が死ぬみたいに人間も死ぬのだ”．

4.4　東日本大震災と猫の島（田代島）

東日本大震災後も，再び観光客を増加させつつある地域もある．たとえば，宮城県石巻市の田代島である．田代島は，「猫島」として知られ，猫ブームとともに多くの観光客がやって来るようになった．（遠藤2023など参照）．海外からも猫を求めて多くの観光客がやって来る（図71）．

田代島も震災で多大の被害を受け，多くの住人が島を去った．観光客も激減した．しかし，その後再び観光客が増大している．図72にその推移を示した．

コロナ化の影響については，まだデータが出ていない．今後こうした猫島が，どのように変化していくのか，注視していく必要がある．

図71　2019年夏の田代島（左上：復興の進む石巻市日和山麓の被災地，右上：石巻港から田代島に向かう海，左下：田代島の猫神社，右下：田代島の野猫）（遠藤撮影）

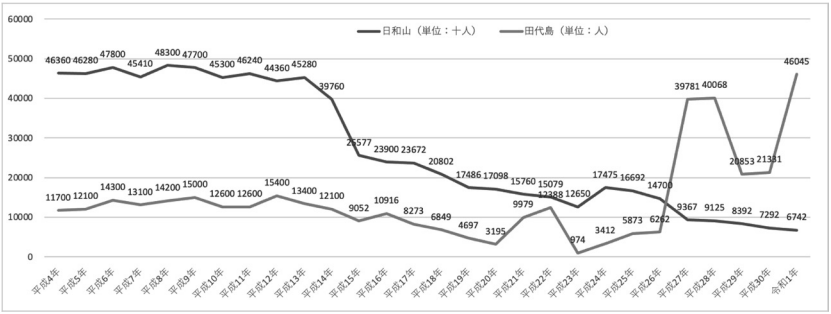


図72　東日本大震災と猫の島（田代島）（データ：宮城県石巻市観光客入込数調べ　グラフ作成：遠藤）

4.5　ポスト・ヒューマンの時代

ここで，さきほどコロナ禍の背景として述べた世界の動向について見てみよう．

現在，われわれは「自然環境は人間が利用するための存在である，もしくは人間がもっとも進化した存在である」との信念（世界観),「人間中心主義と」を無意識に前提として生きていると思われる．

しかし，かつては，人間が〈喰われる〉存在だった．完新世（約12000年前）という地質年代に入って，人間が狩り，喰う主体になり，人間による野生動物の制御･管理がなされるようになった．人間による動物の道具化（生の管理）がなされるようになり，人間による動物の玩具化が行われるようになったのである．

そして，先にも述べたように，人新世と呼ばれる，産業革命以降の時期，とくに1950年代以降の経済活動の爆発的な加速（Great Acceleration）によって，人類が地球および人類自身を大きく変えてしまう状況となった（図73)．人新世では，地球への以下の４つの圧力が顕著となった．

圧力１：人口増加と豊かさの追求

圧力２：気候変動

圧力３：生態系の急激な破壊

圧力４：地球環境の突然，不可逆的，広範な変化のリスク

そして，これらが現在のコロナ禍にも接続しているのである．

すなわち，いま，人間の繁栄（人間中心主義）がその再帰的自己創出による極点に達し，これまでの流れが逆転をはじめた．すなわち，人口の急激な縮小，高齢化，少子化，気候変動，巨大災害による文明破壊，人獣共通（動物由来）感染症パンデミックという方向へ，地球システムが方向性を変えはじめたのである（図75，76）．

その結果，「人間はいつまで地球上で優位を保ち続けられるのか」「人間が優位であることは望ましいことなのか」「動物はどのように位置づけられるのか」といった根源的な問いが浮上してきたのである．

人間中心主義すなわち「自然環境は人間が利用するための存在である，もしくは人間がもっとも進化した存在である」との信念（世界観）が大きくゆらぎ，「人間」というアイデンティティの見直しがせまられることとなった．このとに答えようとする思潮として，「脱人間中心主義」「ポスト・ヒューマニズム」「マルチスピシーズ」「アクターネットワークセオリー」などがある．

そしてこれにともない，動物の解放，動物の権利への関心も高まっているのである（図74）．

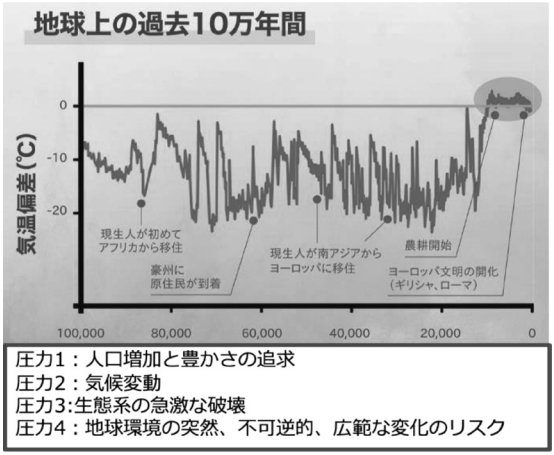


図73　地球環境と完新世（Strom2015=2019:51に遠藤加筆）

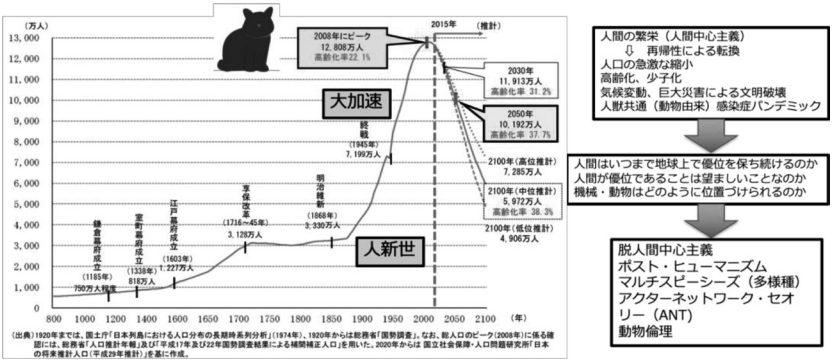


図74　我が国における総人口の長期的推移（出典：「国土の長期展望」最終とりまとめ 参考資料（令和3年6月国土審議会計画推進部会国土の長期展望専門委員会））
https://www.mlit.go.jp/policy/shingikai/content/001412278.pdf　に遠藤が加筆

図75　人間中心種における世界の階層構造
（遠藤作成）

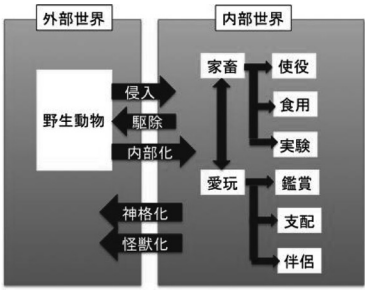


図76　動物の外部化と内部化
（遠藤作成）

5．猫ブームが顕在化させる諸問題

5.1　可視化される猫問題

一般社会で猫のブームが高まり，猫の飼育数が増えるとともに，猫に関してこれまであまり意識されなかった問題が可視化されるようになった．

繰り返しになるが，猫ブームの多様な様相を振り返っておこう．猫ブームは，第一に飼育猫数の増大すなわち愛玩猫の増加というかたちで現れるが，それ

以外にも，たま駅長のように観光客にアピールする「観光猫」，地域全体でその地域の飼い主のいない猫をサポートする「地域猫」，飼い主もいないし地域のサポートもない「野良猫」，もとは飼い猫であったが野生化して人間に敵対するようになった「野猫」などにカテゴライズされる．

これらの分類は，図77のように図化できる．

しかし，このような分類は，明らかに「人間中心」の世界観に基づいたものであり，世界の〈人間化〉の完成を謳うものと見なすこともできる．近年，かつて「ペット（愛玩動物）」と呼ばれていた飼育動物を「コンパニオン（伴侶）」動物と呼ぶ動きもあり，またコンパニオン動物の需要も増大しているが，それは，社会の個人化にともなう個人レベルでの〈癒やし〉の希求によるものであり，人間にとって都合のよい〈他者〉性を恣意的に動物に求めようとするものでしかない．

たとえば，「野猫（ノネコ）」は，本来，人間と共棲みする「イエネコ」であったものが，野生猫へと回帰したものでもあり，そうしてみれば，そもそも野生猫と飼い猫との違いはきわめて曖昧である．にもかかわらず，鳥獣保護法によれば，ノネコは狩猟鳥獣で，他の狩猟鳥獣と同じく狩猟免許，狩猟者登録の上で許可区域において狩猟期間に限り銃や罠による狩猟が可能である．一方，放し飼いの猫や地域猫，野良猫は動物愛護法の愛護動物として扱

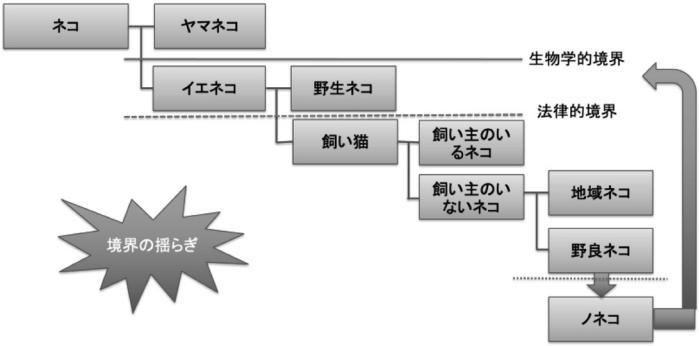


図77　猫ブームによる猫問題の可視化（遠藤作成）

われることとなり，みだりに殺したり，虐待することに関しては同法の罰則が適用される．

このように，法律上の扱いは大きく異なるものの，実際には，その違いを判断する基準はきわめて曖昧なのである．

こうした猫問題に対して，動物の生について関心を寄せる団体（人びと）は，解決策を見いだす努力をしている．たとえば図78，79に示した動物愛護協会のキャンペーンは，現在主流となっている対策を示している．いったん飼うと決めた飼い猫（コンパニオン猫）は，その管理を徹底すること，家の外へも出さないこと，生殖を制限することを求め，決して棄てないことが要請されているのである．

図78　2017年動物愛護協会ポスター

図79　2019年動物愛護協会ポスター

このような要請は，現状において最も合理的な飼い方であり，コンパニオン猫に対して温情的な態度であろうことは理解できる．しかしそれは，人間の社会の側から見た場合である．猫の側からしたらどうなのだろうか？つねに管理され，外へも出られず，子孫も残せない状態におかれたとき，ネコの主体性は毀損されないのか．ネコにとっての〈幸福な生〉とは何か？

この点について，田上は，次のようにまとめている．

野生動物に対しては不必要な介入になる去勢処理が，愛玩動物にとってはむしろ生の質を高めることにもなる．野生動物から生殖の権利を奪うのは不当だが，犬猫の場合はむしろ野放図に生殖させるに任せることが逆に危害になる可能性が高い．

ここから，犬猫のような愛玩動物にとっては，一代限りの生を人間に保護されながら全うするのが幸福ということになる．

これはまた，理念としては，全ての犬猫のような愛玩動物が幸せである場合，それらの動物は，今現在生きている生が幸せなまま尽きた後に，種としては絶滅することを意味する．

ここに動物倫理におけるコンパニオン動物問題の最大の焦点がある．コンパニオン動物はすでに完璧に家畜化されていて，人間の干渉抜きではその生を全うすることはできない．しかし人間に飼われなければ生きられないというのは，その主体的な権利が常に侵害されるということである．動物の権利を尊重することの制度的実態は動物を商品として売買しないことだとしたが，愛玩動物は確かに譲渡や保護によって売買の対象から外すことができる．しかし人間に飼われるということそれ自体が，生を丸ごと他者に所有されることであり，この限りでは奴隷と同じである．動物の権利論は人間の隷属を批判するように動物の隷属を批判する．コンパニオン動物は人間に愛される存在だが，その形式的な地位は奴隷と同じである．ということはコンパニオン動物もまた，解放の対象になるということだろうか．（田上2021：167-8）

5.2　動物の権利と福祉

動物の〈生〉に関する近年の盛り上がりには，「動物の権利」のがわから論じる立場と，「動物の福祉」という立場から論じる立場との二つの系譜がある．

前者の立場に立つ論者には，ヒューム，ルソー，ベンサム，ダーウィン，ソルト，リーガン，シンガー，サンスティーンなどがいる．シンガー（Peter Singer,1946 ～）は「動物を差別的な取扱い―とりわけ動物実験と工場畜産―

から解放するべき」であり，人間にのみ権利を認めるのはスピーシシズム（speciesism 種差別主義）に他ならないとして，功利主義の観点から苦痛を感じる動物を平等な利害配慮の対象にすべきであると主張している．またサンスティーン（Cass R. Sunstein，1954 ～）は「動物に，虐待や残虐からのさまざまな法的保護や，訴訟のための法的地位を与えるために，人間としての地位は必要ない」と論じている．

これに対して，「動物の福祉」からの議論としては，1922年にイギリスの畜産動物ウェルフェア専門委員会の提案があり，そこでは，動物に以下の「５つの自由」を認めるべきとしている．

－飢えおよび渇きからの自由（給餌・給水の確保）

－不快からの自由（適切な飼育環境の供給）

－苦痛，損傷，疾病からの自由（予防・診断・治療の適用）

－正常な行動発現の自由（適切な空間，刺激，仲間の存在）

－恐怖および苦悩からの自由（適切な取扱い）

また，1959年にRussellとBurchは，以下の「３つのR」を提唱した．

－Replacement（代替）:「できる限り動物を供する方法に代わり得るものを利用すること」

－Reduction（削減）:「できる限りその利用に供される動物の数を少なくすること」

－Refinement（改善）:「できる限り動物に苦痛を与えないこと」

さらに，1965年にイギリス議会に提出された「ブランベル報告書」では，「動物福祉」を「動物を研究実験で利用したり，食用に飼育する場合，動物をみだりに殺傷したり，苦しめたりしないようにするだけでなく，適切に取り扱わなければならないという考え」と定義している．

日本における江戸期の『生類憐れみの令』や，動物の「供養」という考え方も改めて興味深い．

折も折，2022年12月15日に株式会社のら猫バンクが会員制サービス「ねこホーダイ」を開始した．「『ねこホーダイ』は月額380円の会員制サービスです．

会員様は提携シェルターの猫を無料で譲り受けることができます．面倒な審査やトライアルもなく高齢者や単身の方でも大丈夫です．また，会員様が飼っている猫を飼えなくなった場合に，提携シェルターに無料で引取ってもらうことができます」（https://noraneko-bank.co.jp/about，2022.12.30閲覧）と謳っている．しかし，「動物をもののように扱っている」などの批判が殺到し，同年12月29日にはサービスを停止した．

5.3　猫・犬への配慮：意識調査から

では，現代日本人は，こうした問題をどの程度認識しているだろうか．2022年６月調査の結果から，2.3節と同様，「犬好き」「猫好き」を軸として，いくつか見てみよう．

図80は，「動物を飼う場合，高齢などにより飼えなくなった場合のことを考えておくべきか」という問いに対する回答であるが，多くの人が問題を理解しており，「動物好き」は最も支持意見が多く，「動物に無関心」なグループは支持意見が少ない．「猫好き」と「犬好き」では大きな差はない．

図81は，「野猫や野犬も地域で世話をするべきか」という問いに対する回答である．支持意見は多くはなく，「動物好き」は最も支持意見が多く，「動物に無関心」なグループは支持意見がきわめて少ない．「猫好き」と「犬好き」では「猫好き」の方が支持意見が若干多い．

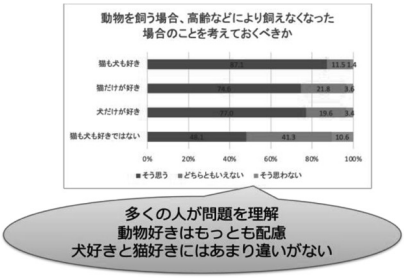


図80　犬好きvs.猫好き：ケアについて

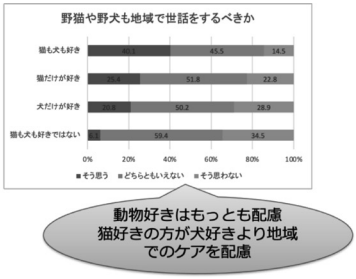


図81　犬好きvs.猫好き：地域について

図82は，「人間や生態系に害をなす動物は，駆除することもやむを得ないか」という問いに対する回答であるが，全体の半数以上が「駆除やむなし」と回答し，「動物に無関心」なグループは支持意見が少ない．「動物好き」と「猫好き」と「犬好き」では大きな差はない．

図83は，「動物にも人間と同等の権利を認めるべきか」という問いに対する回答である．支持意見は多くはなく，「動物好き」は最も支持意見が多く，「動物に無関心」なグループは支持意見がきわめて少ない．「猫好き」と「犬好き」では「猫好き」では大きな差はない．

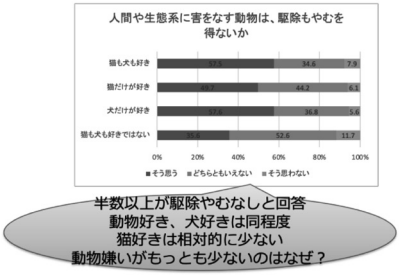


図82　犬好きvs.猫好き：動物の駆除

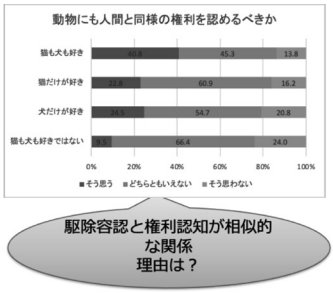


図83　犬好きvs.猫好き：動物の権利

図84は，「肉食は慎むべきか」という問いに対する回答である．全体の半数以上が「駆除やむなし」と回答し，支持意見はかなり少ないが，「動物好き」は最も支持意見が多く，「動物に無関心」なグループは支持意見がきわめて少ない．「猫好き」と「犬好き」では大きな差はない．

図85は，「人間の命は動物の命より重いか」という問いに対する回答である．支持意見は4割程度で，「犬好き」は最も支持意見が多く，「動物に無関心」なグループは支持意見が少ない．「動物好き」と「犬好き」では大きな差はない．

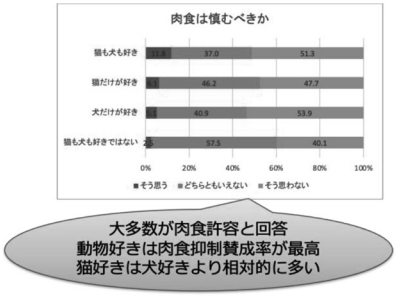


図84　犬好きvs.猫好き：肉食問題

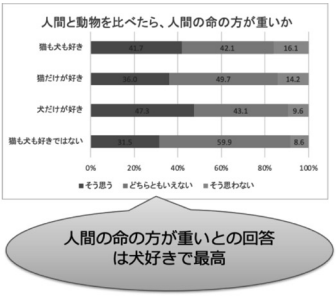


図85

図86左は，やや趣を異にした「話し相手になってくれるようなロボットがほしいか」という問いに対する回答である.「動物好き」は最も支持意見が多く，「動物に無関心」なグループは支持意見がきわめて少ない.「猫好き」よりも「犬好き」の方が支持回答がやや多い.

図86右も，類似の「ペットのようなロボットがほしいか」という問いに対する回答である.「動物好き」は最も支持意見が多く，「動物に無関心」なグループは支持意見がきわめて少ない.「猫好き」よりも「犬好き」の方が支持回答がやや多い.

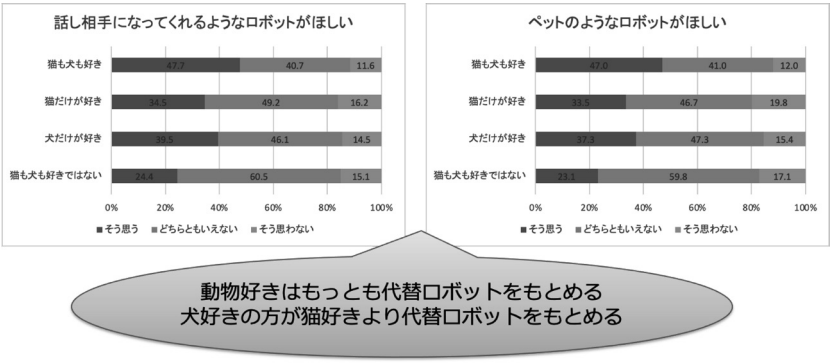


図86　犬好きvs.猫好き：コンパニオンとロボット

意識調査の結果からは，一般に犬好きの人の方が，人間中心主義的な世界観を維持しており，猫好きの方が，動物の権利や福祉に敏感であることがう

かがわれる．猫の境界性が，社会外視座の獲得を媒介するとも考えられる．

5.4　動物―人間―機械における〈他者〉性の相互性と再帰的変容

人間中心主義を相対化しようとする言説として，デリダは，「私はあなたがたに「彼ら」と言う，「彼らが動物と呼ぶもの」と，この人々から私がつねに，ひそかに，自分を例外として除外してきたことを，はっきり強調するために．そして，私の歴史のすべて，私の問いたちの系譜のすべて，真実には，私が追跡し，思考し，書くところのもの，痕跡をたどり，抹消もするところのもの，そのすべてはこの例外から誕生したように，そして選ばれているというこの感情に鼓舞されてきたように思われるということを．あたかも私が，彼らが動物たちと呼ぶものからひそかに選ばれた者であるかのように．」（Derrida2006=2014）

また，ハラウェイは，「つの疑問，つまり（一）私が，うちの犬に触るとき，自分はいったい誰／何に触れているのだろうかという疑問，そして（二）一緒になる（becoming with）」というのは，どういった意味で「現実世界的（worldly）になる」実践といえるのだろうか」（Harawey2007=2013）と述べている．

こうした人間と動物との関係に関する省察は，人間同士の関係における〈他者〉性についての問いとも容易に接続するだろう．たとえば，トニは，次のように述べている．「世界規模で踏み込んで来る人びとのわたしたちを動揺させる圧力」「によってわたしたちは，自分たちの文化・言語に狂信的にしがみつくいつぽうで，他の文化・言語は退ける．時代の流行に沿ってわたしたちを鼻持ちならぬ悪の存在にする圧力．法的規制を設けさせ，追放し，強制的に順応させ，粛清し，亡霊やファンタジーでしかないものに忠誠を誓わせる圧力．何よりもこれらの圧力は，わたしたち自身のなかの「よそ者（外国人を否定し，あくまでも人類の共通性に抵抗させるようにわたしたちを仕向ける．（Morrison2017=2019）

さらに，ハラウェイは次のようにいうのである．「モダニズム版のヒューマニズムも，ポスト・ヒューマニズムも，自然とみなされる存在と，社会とみなさ

れる存在，人間以外とみなされる存在と，人間とみなされる存在との間に横たわるもの――ブルーノ・ラトゥールが「大いなる分岐」と呼ぶ一連のもの――を，主たるリソースとしつつ存続してきた．こうした「大いなる分岐」から生み出された「人間」にとっての主要な「他者たち」（「ポスト人間」を含む）は，西欧文化，それも過去と現在の双方の西欧文化の存在論ともいうべき品種登録――「神」，「機械」，「動物」，「モンスター」，「蠢」，「女性」，「従僕」，「奴隷」，そして非「市民」一般――にしっかり書き込まれている．明瞭な理由というセキュリティ・チェックポイントの外部や，「同じなるもの」という聖なるイメージの再生産装置の外部で，こうした「他者たち」は，権力や自分らしさといったものの中枢に．パニックを起こす卓越した能力を有している．恐怖は，ハイパー偏愛状態やハイパー恐怖状態にしばしば表出されており，例としては，紀元二一世紀初頭の動物（ラップドッグ）と機械（ラップトップ）の間に「大いなる分岐」がひきおこした恐怖を挙げれば十分だろう．（Harawey2007=2013）．

そして，私たちは，図75において最下層に位置づけられている〈機械〉という他者にも思いをいたさざるを得ない．〈機械〉は，〈生命〉をもたないがゆえに，〈神〉から最も遠い存在とされた．しかしその一方で，人間たちは，自分たちがもたない能力を〈機械〉によって実現しようとし，現代においては，人間とまがうばかりの（あるいは人間には及びもつかない能力をもった）ロボットやAIを創り出したのである．これによって，実は，図75に示した階層構造は逆転し，循環することになる．（遠藤2018など参照）．いま，人間たちは，〈機械〉に使役される不安におびえているのである．

その一方，人間たちの品種改良技術も進んでいる．病気や障害を克服するために，人工機器を体内に埋め込んだり，あるいは遺伝子工学によって遺伝子を操作する技術も進んでいる．人間以外の動物種の臓器を移植したりする医療も開発されている．こうしたサイボーグ化によって，人間はどこまで人間なのか？人間は機械ではないのか．人間は動物ではないのか．といった問いはますます大きくなっているのである（図87）．

図88に示すような状況において，もしかしたら，機械の一種である人間，

動物と（言葉の本来の意味で）家族である人間（ポスト・ヒューマン）はどのように生きていくべきなのだろうか.

図87　動物―人間―機械における〈他者〉性の相互性と再帰的変容（遠藤作成）

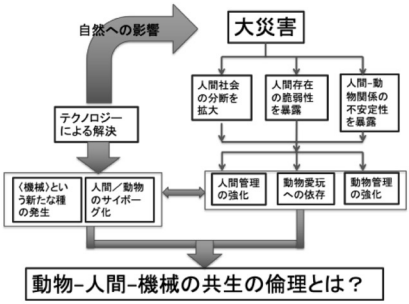


図88　動物―人間―機械の共生の倫理（遠藤作成）

6．おわりに

さて，では，これらの問題に対して，いかにして〈猫〉は解への導き手となるのだろうか？

まず，なぜいま〈猫〉について考えることが重要かという点について見てみよう.

近年,「猫ブーム」と呼ばれる動きが顕著であるが，本稿でみてきたように，猫ブームによって，猫を通して世界の多様な在り方が意識されるようになった．また，猫に関わるさまざまな問題が，日常のなかで多くの人びとに気づかれるようになった.

そしてこれらが，先ほど見たポストヒューマニズム問題と深く重なり合うことはおわかりいただけるだろう．すなわち，私たちは，いま，猫問題を通じて，ポストヒューマニズム問題と日常的に関わり合っているのである.

なぜそのようなことが起こるのか．それは,〈猫〉が境界にいる,からである.すなわち,

猫は人間世界と野生世界の境界にいる

猫は〈カワイイ〉と〈恐怖〉の境界にいる

猫は従属と自律の境界にいる

猫は種への介入度が低い．すなわち，家畜と野生の境界にいる．

このような特質によって，〈猫〉は，境界問題を析出し，それへの対処を指し示す可能性があるのである．本稿では，〈機械〉について述べる余裕はなかったが，今後，プレ・ヒューマン期，人間期，ポスト・ヒューマン期を貫いて，猫のまなざしを通して，動物―人間―機械の共生の倫理を探っていくことを引き続き続けて行きたい．

【付記】

本稿執筆にあたっては，2019-2022年度科研・基盤研究（C）「東日本大震災からの復興と共同体－－三陸沿岸の産業史を踏まえて」，令和3年度昭和会館研究助成，令和4年度学習院大学東洋文化研究所特別プロジェクト助成を受けた．記して感謝する．

【関連文献】

Agamben, Giorgio, 2002, L'aperto: L'uomo e l'animale, Bollati Boringhieri editore, Torino.（岡田温司他訳，2011，『開かれ―人間と動物』，平凡社）

Bailly, Jean-Christophe, 2007, LE VERSANT ANIMAL.（石田和男・山口俊洋訳，2013，『思考する動物たち―人間と動物の共生を求めて』出版館ブック・クラブ

Derrida, Jacques, 2006, L'ANIMAL QUE DONC JE SUIS, Editions Galilee, Paris.（鵜飼哲訳，2014，『動物を追う，ゆえに私は〈動物で〉ある』筑摩書房）

遠藤薫，2008，「近世・近代く日本>におけるく時計>技術の受容と変容―グローバリゼーションの二重らせん」『学習院大学法学会雑誌44巻１号』p.31--58

遠藤薫　2015 「招き猫とは何か――近世都市伝説と始原神，およびその現代的意義」文化資源学会研究大会報告
遠藤薫，2017,「近世の都市―農村の文化的交差―〈近代〉を準備した江戸の猫ブーム」『学習院大学法学会雑誌』第53巻１号（2017年９月）
遠藤薫，2018,『ロボットが家に来るとき…人間とAIの未来』岩波書店
遠藤薫　2018 「幕末から維新期における社会変動と大衆の無意識――招き猫と化け猫」『学習院大学法学会雑誌』54－1号
遠藤薫　2019a 「猫神の迷宮―始原伝説と動物信仰の交錯と循環」『学習院大学法学会雑誌』55－1号
遠藤薫，2019b,「猫と高等遊民―夏目漱石が構想した日・英・中“文学公共圏”」，遠藤薫編『日本近代における“国家意識”形成の諸問題とアジア―政治思想と大衆文化』勁草書房
遠藤薫，2020,「〈猫聖地〉の地政学的考察」『学習院大学法学会雑誌』第55巻2号
遠藤薫，2021,「カワイイの世界」（https://ej.alc.co.jp/archive/category/カワイイの世界）
遠藤薫，2023,『〈猫〉の社会学』勁草書房
Foucault, Michel, 2004, LA PEINTURE DE MANET; suivi de Michel Foucault, un regard, Editions du Seuil.（阿部崇訳，2019,『マネの絵画』，ちくま学芸文庫）
Francis, Richard C., 2015, DOMESTICATED: Evolution in a Man-Made World.（西尾香苗訳，2019,『家畜化という進化』白楊社）
藤田嗣治，1948,『巴里の昼と夜』,「顔」叢書〈第3集〉
藤田嗣治，2003,『藤田嗣治画文集　猫の本』，講談社
Gray, John, 2002, STRAW DOGS : Thoughts on Humans and Animals.（池央耿訳，2009,『わらの犬―地球に君臨する人間』みすず書房）
Gray, John, 2020, FELINE PHILOSOPHY: Cats and the Meaning of Life, Wylie，Lomdon.（鈴木晶訳，2021,『猫に学ぶ―いかに良く生きるか』み

境界としての〈猫〉―ポストヒューマンの時代に「猫と生きる」とはいかなることかすず書房）
Harawey, Donna, 2003, THE COMPANION SPECIES MANIFESTO.（永野文香訳，2013,『伴侶種宣言』以文社）
Harawey, Donna,2007, WHEN SPECIES MEET, University of Minnesota Press.（高橋さきの訳，2013,『犬と人が出会うとき―異種協働のポリティクス』青土社）
林美一，1991,『勝川春章』河出書房新社
林洋子，2013,『もっと知りたい藤田嗣治―生涯と作品』，東京美術
Herzog, Harold, 2010, Some We Love, Some We Hate, Some We Eat, HarPerCollins Publishers, New York.（山形浩生他訳，2011,『ぼくらはそれでも肉を食う―人と動物の奇妙な関係』柏書房）
生田武志，2019,『いのちへの礼儀―国家・資本・家族の変容と動物たち』筑摩書房
稲垣栄洋，2019,『生き物の死にざま』草思社
兼築信行，2022,「野良猫を詠んだ歌――和歌研究者の愉悦」『汲古』2022年12月号，51－54
片山一道，2016,『身体が語る人間の歴史―人類学の冒険』筑摩書房
Katcher, A.H. & Beck, Alan M., 1983, NEW PERSPECTIVES ON OUR LIVES WITH COMPANION ANIMALS, University of Pennsylvania Press.（コンパニオン・アニマル研究会，1994,『コンパニオン・アニマル―人と動物のきずなを求めて』誠信書房）
加藤周一，1997,『加藤周一著作集（19）藝術における伝統と現代性』平凡社
河村錠一郎，1991,『ビアズリーと世紀末』青土社
小林忠，1998,『浮世絵の歴史』美術出版社
Levi-Strauss, Claude, 1991, HISTOIRE DE LYNX, PLON,Paris.（渡辺公三監訳，2016,『大山猫の物語』みすず書房）
三菱一号館美術館，2022,『ヴァロットン――黒と白』筑摩書房
三浦篤，2018,『エドゥアール・マネ 西洋絵画史の革命』，角川選書

宮永孝，2000,『ポーと日本　その受容の歴史』彩流社
Morrison, Toni, 2017, THE ORIGIN OF OTHERS.（荒このみ訳，2019,『「他者」の起源――ノーベル賞作家のハーバード連続講演録』集英社新書）
村上春樹，2020,『猫を棄てる』，文藝春秋
内藤ルネ，2002,『内藤ルネ―少女たちのカリスマ・アーティスト』，河出書房新社
大倉健宏，2020,『エンゲージ（Engage）された空間：#ペットフレンドリーなコミュニティの条件』学文社
小野俊太郎，2007,『モスラの精神史』講談社
Rogers, Katharine M., The Cat and the Human Imagination: Feline Images from Bast to Garfield, The University of Michigan Press.
Singer, Peter, 2009, ANIMAL LIBERATION.（戸田清訳，2011,『動物の解放［改訂版］』人文書院
Steinlen, Théophile-Alexandre, 1980, Steinlen Cats (Dover Fine Art, History of Art) , Dover Publications.
Strom, Bokforlaget Max, 2015, BIG WORLD SMALL PLANET.（武内和彦他監修，2018,『小さな地球の大きな世界 プラネタリー・バウンダリーと持続可能な開発』丸善出版）
Sunstein, Cass R. & Nusbaum, Martha C. (eds.), 2004, Animal Rights: Current Debates and New Directions, Oxford University Press.（安部圭介他訳，2013,『動物の権利』，尚学社）
田上 孝一，2021,『はじめての動物倫理学』集英社新書
高階秀爾，1969,『名画を見る眼』岩波新書
高槻成紀編，2015,『動物のいのちを考える』朔北社
Tucker, Abigail, 2016, The Lion in the Living Room: How House Cats Tamed Us und Took Over the World.（西田美緒子・訳，2018,『猫はこうして地球を征服した―人の脳からインターネット，生態系まで』インターシフト）

内田魯庵，1893，『鳥留好語』警醒社

浦島茂世，2019，『猫と藤田嗣治』エクスナレッジ

Wadiwel, Dinesh Joseph, 2015, THE WAR AGAINST ANIMALS.（井上太一訳，2019，『現代思想からの動物論――戦争・主権・生政治』人文書院）

渡辺 晋輔，2010，『ウルビーノのヴィーナス―古代からルネサンス，美の女神の系譜』，三元社